

み見させ玉ふに、前後の數村窮困して煙氣起らず、嗚然として悲歎して勅し玉はく、朕は貧しき哉、朕は乏しき哉。左右奏して申さく、貴き事天位に在す、富み六合を保ち玉ふ、何ぞ貧乏の愁ひましますんや。帝勅して曰く、今是れ國民貧し、何ぞ六合を保ちて利と云はん、今是れ百姓乏し、何ぞ天位に在りて高しと云はん。夫れより浪華の御殿に歸らせ玉ひ、群臣に勅し玉はく、朕高き山に登りて、遠く民間を望むに、遠村近里斷れて煙氣起らず、是れ百姓都て貧窮にして家に一粒も炊く物無きの致す所に非ずや。古聖徳の君王の御代を傳へ聞くに、萬民盡く富み榮えて、日々に君王徳澤の徧き事を賛歎し、家を盡く康らかなる哉と歌ふとこそ聞け。朕いま即位三年、歌頌の聲終に耳に入らず、炊く煙幽にして斷えくくなり。即ち知る、五つの穀もの登らず、百姓已に窮乏なる事を。封綏の内すら斯の如し、況んや畿外においてをや。三月朔己酉群臣を召して、歎き詔して曰く、今より後三年悉くに課役を除いて、調貢を納めず、百姓の辛苦を休へしめよ。夫れ孰々天理を考れば、天皇は國民の父母、大臣は國民の兄みなり、國民の爲めに身をくるしめよ。若し然らずんば理に當らじ。儉約を守らずんば、何を三年を保たん。朕と群臣と心を一つにして身を苦しめ節儉を守り、勤めて萬民を救はん。誠に是れ國家の父、萬民の兄みの道なりと。

時に大臣及び群臣大に悦んで、皆落涙して前み奏して申さく、臣等が身命は盡く皆天王に擧げ奉る、只今飢れて死すとも惜しむ所なし。況んや大道の爲め、萬民の爲めなるをや。道のため民のために饑寒を忍ぶに、何の恐るゝ所か是れ有らんと。君臣相談して、初めて三年の法を定め、諸國萬民の宅に配して、田租の半を賜ふ。天皇も、大臣も、是れより魚衣魚服、黼衣黻履弊れ盡きて而して後に作り、温飯暖羹酸饌して而して後に易ふ。君臣上下共に携へて、嘉肴美酒を禁じ、妃嬪妖嬈を退く。民間の窮餓を救ひ、國家の艱辛を蘇せんが爲め、自家の榮耀を制し、互に節儉を守り、限りも無き困苦を嘗め玉ふ事、上も無き陰徳行ならずや。上下いつしか面上覺えず菜色を浮べ、互に相見て計らず涙痕を帯ぶ。日々各々清閑無事を樂しませ玉ふ。越に於ていつしか宮垣傾き崩るれ共修せず、茅茨壞れおつれ共さらに以て葺かず、風雨すきまを穿つて郷衣の袂沾し、星辰屋壁を穿つて霜露床蓐に滿つ。不思議なる哉、其後年々風雨時に順て、五穀豊なり。未だ三年を経ざるに民間盡く富饒なり、願音野にみちて炊煙浮び繞る。七年夏四月辛未の朔、二見山に天皇自ら登らせ玉ひ、遠く民間を望み見させ玉ふに、祥煙連り浮び、瑞霧遶り圍む。天皇限り無く御歡喜ましく、打笑ませ玉ひて、御製有り云はく、「高き屋に登りて見ればけむり立つ民の

籠は賑ひにけり」と。即ち浪華の御殿に還り入らせ玉ひ、皇后に對し御仰せ有りしは、悦ば  
 せ玉ひてよ、朕今既に富めり、何の愁る處か是れ有らんと。皇后答へ申し玉はく、宮垣破  
 れて髮毛盡く風に枯れ、殿屋破れて衣襟露に曝さる、何の富めりと宣玉ふ御事は是れ有ら  
 んど。天皇重ねて勅し玉はく、夫れ天の君皇を立て置かせ玉ふ事は、百姓を安んせんが爲  
 めなり。然らば即ち天下に君たらんず人は、百姓を以て本とす。是を以て古の聖主は、國中  
 一人も飢寒する者有れば、盡く是れを顧み、是れを聞き、是れを問ひ尋ねて、身を責め吾  
 を辱めて、天に謝し玉ふ。今百姓貧しきは則ち是れ朕が貧しきなり、百姓の富めるは則ち  
 是れ朕が富めるなり。神代より以來未だ有らじ、百姓貧しうして天皇富めりと云ふ事はと。  
 皇后御手をつかせ玉ひ、貴ふとやな有難やな、君は正しく漢家にも本朝にも比類もかはせ  
 め仁君にてわたらせ玉ふ嬉しきと。御涙せきあへさせ玉はざりける由。寔に千載の美談  
 ならずや。古來世間の暗君庸主は即ち然らず。内には苦諫を聳ぐる老臣なく、外には國家  
 を愁ふる賢佐無きが故に、獨り自ら富貴を恃み、威權に誇りて、徒に日々人欲の私勝ちて  
 驕奢を究むるを以て自家の勤めとし、稼穡の艱難を顧みず、國家の窮困を察せず、黎民の  
 油を絞つて、美酒嘉肴殿中に溢れ、嘉果珍饈堂上に充つ、蛾眉列り遶り、美質紅顏前後に

圍ひ、絲竹管絃の音晝夜に斷ゆる事なく、簫笛琴鼓の響蚤暮に息む時なし、其の浮費棄楚  
 の富みと云へとも足るべからず。此において多く酷吏の輩を尋ね擇び、是れを民間に放つ  
 て國中を貪り掠め、黎民を責め苦しむ。恰もしめ木を叩へて油を絞るが如し。賦税は年々  
 五分三分宛切り上げ、課役は月々に二種三種宛觸れ増す。萬民の悲泣は叫喚燒熱の衆生の  
 如く、國家の苦惱は黒繩衆合の罪人の如し。此等の苛政は國君人主等の御身の上にはつゆ  
 ちり知し召さざる事ともなり。皆是れ中下の人々の、忠節に事寄せ、竊に組み立て玉ふ私  
 曲なり。外面は忠義に似たりと云へ共、内證は上もなき大不忠節なり。國家を苦しめ、萬  
 民を責め惱ますの罪障、積りくして誰が身の上にか歸せんや。勿體なくも畢竟皆盡く主君  
 の御身の上に積み集めて、御武運を殺落して御壽命を切縮め、果ては國家を亡し、御子孫  
 を斷絶せしむるに到る。古來明德至善の君子、仁澤を天下にほどこさんと思ほし立ち玉ふ  
 とき、最初に専ら仁吏を擇び用ひ、酷吏を恐れ遠け玉ふ事は何ぞや。酷吏の國祚を害ひ、  
 國脈を斷つ事、鳩羽一片河水に投じて、魚鱗悉く皆斃れ、水銀一滴木根に入りて、松柏俄  
 に枯るゝが如し。酷吏は代々先君の宗廟をして荆棘の野と成し、狐兔の栖家とす。憎んで  
 も惡んすべきは酷吏なり。酷吏は代々先君の神靈をして、祭奠なきの閑神とし、依る方な

きの野鬼とす。恐れても惶るべきは酷吏なり。この故に明君聖主は、酷吏を忌みすて玉ふ事屍穢の如く、酷吏を憎み遠け玉ふ事葦汚の如くし玉ふ。暴君暗主は専ら酷吏を貴び用ゆ。是故に云ふ、聖主出て酷吏ひそみ、暗君立て酷吏肩を抜くと。吏は作麼胡爲者とかするや。案に云く、吏は民を治むる官なりと。異に云く、吏は民を惱ます官なりと。蓋し吏に仁吏有り酷吏有り、常に民の利害を考へ、土の濃瘠を察し、稼穡の艱難を憐みなげき、凶年饑饉には賦税を寛め、課役をかるうし、民をして飢凍に苦しませざらしめ、國祚をして堅剛にし、君をして千歳の後までに苛政の謗を引かさらしむるを以て己が急務とす。是故に生民なつく事爺孃の如し。謂つべし、民を治むる官なりと。敬しても敬しつべきは仁吏なり。仁吏は寔に用ひつべし。酷吏は大に是れに反す。蓋し酷とは刻剝の義なり。民を貪り苦しむる事刻むが如く、財産を掠め取る事剝ぐが如し。酷吏は歳の凶豊に管せず、民の凍餒をかへり見ず、徒に自ら奪ひ食るを以て己が忠節とす。昔人は是れを聚歛の臣とす。其奪ひ盗む事、智君子に過ぎたり。故に云ふ、聚歛の臣有らんよりは寧ろ盜臣有れと。賄賂あるの訟は水に石を投ずるが如く、賄賂無きの訟は水に石を投ずるが如し。譬へば張三と李四と共に争ひ訟ふる事有らん、其初め理非を分たず、勝敗を辨せず、混然として目を

かさぬ。張是れを愁ひて竊に寄する事有る則ば、李が空處を探つて少しく是れを伺す、李大に驚き恐れて、竊に寄する事有る則ば、又張が空所を捉へて少しく是れを伺す、張李共に互に驚き恐れて、代る／＼相寄すと云へ共、金餘辨せず、玉石分たず、或は五年、或は十年寄せ寄せて、遂に財盡き力窮りて一向寄する事能はざる者を捉へて、終に是れを負所に擯す。是故に民の酷吏を恐れ憎む事、惡虎の聚落に在るが如く、疫鬼の國中に流行するが如し。往々に世の邦君國主は夢にも知し召さず、自らおもへらく、國豊に民康しと、いつしか君を桀紂の君にし、民を桀紂の民にす。謂つべし、吏は民を惱する官なりと。昔秦桎梏を恣にし、威權を恃んで、咸陽の高臺を築き、阿房の廣宮を構へて、大に誇る。是故に財用足らず、俄に酷吏を放つて天下の財利を奪ふ。倉粟充ち溢れ、生民曠り恨む。久しからずして咸陽燒れ阿房燼す。桀紂幽厲の暴君暗主、各々酷吏を愛し用ひて、民をして塗炭の中に苦しましむ。果して四海の富みを失ひ、萬乗の貴階をくだる。須らく知るべし、民は國家の本なる事を。民は一身の元氣の如し。是故に云ふ、氣盡くる則は人死し、民衰ふる則は國亡ぶ。諺に是有り、云く、天將に雨らんとする時は、山色必ず近く、國將に亡びんとする時は、民間先づ苦しむ。元祿の初め中國の内、何某の侯の家に酷吏有り、大に民

を貪り掠め、生民悲しみ哭す。村民の長たる者有り、争ひ諫めて強く利害を説く。酷吏大に瞋り憎んで、竊に訟へ讒して、彼の村民の長を誅す、長誅せらるゝに及んで、天を仰いで長歎して云はく、我若し罪の誅せらるべき有りて、我を誅せば即ち止まんぬ。若し又罪無うしてわれを誅せば、爾見上君侯必ず三年の活を得ん、國脈必ず三年にして斷絶せん、爾が輩是れを見よと云ひ了つて死に就く。天色朦朧として草木慘然たり。誰か計らん、其候未だ一兩日を経ざるに乍ち心痛の重洞を發せんとは。百藥寸功なく針灸するも無うして衆醫手をつかねて終に死亡を見る。一城大に慟哭す。嗣子四歳なりけるを、傳奏所へ奏し願ふて家督を續がしめんと、家中の古者相添ひ、遙に武陵に趣く。着府未だ日あらずして是れ又俄に早世す。悲しむべし、十萬石餘の大家、乍ち根を斷ち葉を枯し、數千人の家中、老幼尊卑東西に分離し、南北に奔波して、一城乍ち空墟となりぬ。是れ彼のさきに謂ゆる酷吏の國家を亂り、國脈を斷つ現證なり。後來寶永丁亥の春、予行脚して錫を其城下に留む。一日持鉢の次て、道友三五輩、伴つて彼の候の師檀の寺に入りて、先の城主の宗廟を見る。香華ひしく道絶えて、鬼哭し、神悲しむに似たり。各々額を擡めて嗟悼して云はく、嗟己んぬる哉、唯是れ一箇酷吏の苛虐より起つて、終に此荒蕪を見る。一國の君、一城の

主たらん人々の恐るべきは酷吏なり。是れ即ちさきに謂ゆる酷吏代々先君の宗廟をして荆棘の野となし、狐兔の栖家とし、酷吏は代々先君の神靈をして祭奠なきの閉神とし、依る方なきの野鬼とするの現證なり。譬へば此に賊臣有りて秘計を廻らし、奇譚を設けて、其國を亂し、其家を破り、其君を害ひ、其群臣をして東西に分離せしめ、終に其國脈を斷たんと計らば、國國人皆盡く瞋り憎んで、鼓を鳴らして是れを責め、油もて煮、牛もて裂くと云へ共、飽き足る事無けん。殊に知らず、酷吏は寔に是れよりも甚だしき事を。酷吏は外面は忠節に事寄せ、萬民を貪り、國家を苦しめ、二代相恩の主君をして此天誅を招かしむ。其中には人知らぬ私曲有り、然るを是れを愛し是れを用ひば、國夫れ久しからざらんか。寔に危いかな。時に一僧あり、勃如として頭を掉て云く、否なり、酷は奢の影なり、奢は弊の如く、酷は響の如し。予が曰く、何と云ふ事や。原ぬるに夫れ暗君國を得る則は必ず奢る、奢る則は多く妃嬪を列ね、妖嬪を聚む、あつむる則は財用足らず、たらざる則は百端を究めて是れを求む。財の物たる木に就いても求むべからず、水に就いても得べからず。越に於て酷吏の老けき者けきを擇んで、是れを民間に放つて、黎民の財利を掠め奪ふ。うばふ事烈しく得る事の多きを愛して、以て賢なりとし、以て忠節なりと稱して、是れに授

くるに官を以てし、是れに賜ふに爵を以てす。此において吏族大に眉をひらきて、飛廉が肩を曠らし、惡來が臂を張り、王莽が眸を凝らし、董卓が頭を掉つて、賦税に事寄せ、官租に擬へ、民の穀帛を掠め奪ふ事、枯骨を絞つて汁を求むるが如し。越において國衰へ、民疲る、冬暖なれども兒は凍むたりと號び、年登れども妻は飢むたりと泣く。而して後に衆民盡く曠り恨み、愁ひ背く。そむく則ば其國必ず天禍あらざれば人刑有り、國夫れ久しからざらんか。是故に云ふ、鳥の將に死なんとする時、其鳴くこと悲し、國の將に亡びんとする時、其食ること烈しと。寔に恐るべし。吏もまたよろしく自ら計りて恐れ慚しむべし。君侯の威權を假借して濫に民を貪斂し、濫に民を惱害し、濫に民を掠め奪ふ。大凡仁義あらん武士の假初にも爲すべき業は、忘れても有るべき事かは。嗟夫れ爾の後を如何。豈に特り他の國祚を害し、他の國脈を斷つて、而して後に休する者ならんや、自家もまた必ず爾の繼嗣を斷たんか。豈にそれ爾の繼嗣を斷つのみならんや、人の臣として君の國家を亂る、不忠是れより甚だしきは無し、人の臣として君の國祚を斷つ、罪過是れより大なるは無し、死後には必ず無間燒熱の惡處に墮して、俱底恒沙の苦患を受け、火血刀の辛酸を嘗めん。熱々願ふに、侯吏品殊に、尊鄙事異りと云へども、誰か其祖宗なからん、

若し其れ果して祖宗あらば、各々泉下に在て、爾が官吏にうつるを見れば、必ず大に啼泣して云はん、焦穀芽なく酷吏後無し、我が輩久しからずして必ず祭奠なきの閉神と成り、依る方なきの野鬼とならん、嗟願くは酷吏なれや、順吏と成る事なかれと。願ふに仁酷並び立つと云へ共、否泰遙に霄壤なり。大凡世の吏たる人の後を見るに、仁吏の種族は後來必ず盛大なり。酷吏の部類は向後多くは郎當落魄して、道路に餓死す。四十年前何某の處の役所に酷吏有りき。人民大に憎み恐る。久しからずして人禍有りて俄に其職を剝かれ、改易せられて牢落す。父は和樂を歌ふて袖乞ひし、子は軍書を讀んで人の門閭に立つとかたり終て慘然たり、或人の云く、酷に兩般有り、謂はゆる奢と貪となり。奢より出る者は公なり、貪より出る者は私なり、私は多く、公は少し。公は恐るゝ所なし、公然として是れを奪ふ。私は恐るゝ所多し、必ず密に村民の長を語ひ、志を同らし、計を定めて、而して後に官命なりと稱して、恣に貪り掠め、日々に奪ひ、月々に掠めて、終に其利を二つにして、吏と長と是れを分つて公は預からず。是故に長家は月々に繁興して、康藝が高廈を構へ、石崇が堂輿に坐し、絃歌遠く傳へて、轂車轟き鳴る。細民は日々に衰へ、月々に悴けて、妻孥もまた養ふ事得ず、家々に苦しみ哭し、戸々に衰へかじけて、窮餓相煎す。野に

茶色多く、怨恨内に逼る。此において或は二萬、或は三萬、蟻の如くに聚り、蜂の如くに起ち、恨み叫んで先づ彼の長家を圍んで、門闕を破却し、家財を粉砕す。若し彼の長を捉へば、必ず裂いて食はんとす。其勢折くべからず。果ては城中に込み入り、狼藉せんとす。此において領内の寺院を備て、誰し騙して是れを治む。靜謐の後、竊に狗を廻はして彼の張本をさぐり捉へて、或は二十、或は三十、或は磔し、或は誅して、爛骸野に偏し。特に知らず、張本は民にあらず、却て吏と村民の長となる事。譬へば此細民有りて、五箇三箇伴を結んで遠く佗國へ行かんに、佗國の民若し本國の侯を指して、或は罵り、或は謗る事有る則は、彼の細民大に嗔り叫んで、打果す事もまた顧みず。諸國の民皆然り。吏若し先代の仁吏に習て、年の凶豊を考へ、民の否泰を察して、上下利を同うし、高鄙苦樂を共にせば、國君に對して豈に此の凶態有らんや、窮鼠却て猫を咬むと云はんか。然らば即ち張本は民にあらず、吏と長とにあらずして何ぞや。故に云く、財散する則は民聚り、財聚る則は民散すと。民散すとば、衆民恨み背きて、老ひたるを負ひ、幼きを携へて、佗國に走るを云ふにあらず。境を越えず、佗國へも行かざれば、民心疎み離る。是れを民散すと云ふ。民聚るとば、衆民悦び慕ふて、佗國を離れ、軍食盡せして我國に來り聚るを云ふにあらず、民心懷き悦ぶ、是れを民聚ると云ふ。君仁徳有りて萬民を憐み救ひ、酷吏の輩を忌み遠け、毫釐も民を貪り掠め玉はざる則は、衆民悦び懷き、市に謠ひ、野に拍つて云く、我が侯願くは萬歳なれや、此の君の爲めに予ならば、白刃をも踏んづべし、黒火にもまた投じつべし、我が侯願くは萬歳なれやと。民心斯の如く貴び懷く、是れを民聚ると云ふ。若し又國君貪欲にして、専ら酷吏を貴び用ひ、民を貪り掠め苦しめ、金銀を夥しく貯へ納め、國家を困窮せしむるのみならず、左右の近臣までもも逼迫せしむ。此において衆民恐れ憎むこと怨鬼の如く、恨み背き、嗔り罵り、市に哭し野に悲んで云く、嗟願くは仁人あれや。願くは多く豪傑の武臣を卒して、競ひ來て文武の紂をうつが如く、劉項の案を破るが如く、吾境に入り、吾國を治めて、逐一酷吏の輩を誅して、吾輩の貧困窮餓を助け玉へかし、吾輩の旦暮を安らしめ玉ひてよと。天に訟へ神に祈る、斯く迄人心離れ背くを、是れを民散すと云ふ。熱々願ふに、世に羨からぬ者は村民の長家なるなり。五十年來予が東西二十里の間、村民の長たりし人々の家、大凡數百家の末を見るに、多くは邸當落魄、盲人と成る有り、希有の難病を受けて癡人と成る有り、其中少しも衰滅無く相續し、繁昌しめて行くもの、纔に八九家、是れは定めて勤役の中少しも貪り掠むる事無き、善き仁徳

ふにあらず、民心懷き悦ぶ、是れを民聚ると云ふ。君仁徳有りて萬民を憐み救ひ、酷吏の輩を忌み遠け、毫釐も民を貪り掠め玉はざる則は、衆民悦び懷き、市に謠ひ、野に拍つて云く、我が侯願くは萬歳なれや、此の君の爲めに予ならば、白刃をも踏んづべし、黒火にもまた投じつべし、我が侯願くは萬歳なれやと。民心斯の如く貴び懷く、是れを民聚ると云ふ。若し又國君貪欲にして、専ら酷吏を貴び用ひ、民を貪り掠め苦しめ、金銀を夥しく貯へ納め、國家を困窮せしむるのみならず、左右の近臣までもも逼迫せしむ。此において衆民恐れ憎むこと怨鬼の如く、恨み背き、嗔り罵り、市に哭し野に悲んで云く、嗟願くは仁人あれや。願くは多く豪傑の武臣を卒して、競ひ來て文武の紂をうつが如く、劉項の案を破るが如く、吾境に入り、吾國を治めて、逐一酷吏の輩を誅して、吾輩の貧困窮餓を助け玉へかし、吾輩の旦暮を安らしめ玉ひてよと。天に訟へ神に祈る、斯く迄人心離れ背くを、是れを民散すと云ふ。熱々願ふに、世に羨からぬ者は村民の長家なるなり。五十年來予が東西二十里の間、村民の長たりし人々の家、大凡數百家の末を見るに、多くは邸當落魄、盲人と成る有り、希有の難病を受けて癡人と成る有り、其中少しも衰滅無く相續し、繁昌しめて行くもの、纔に八九家、是れは定めて勤役の中少しも貪り掠むる事無き、善き仁徳

の人々の後なるべし、其餘は多くは根を断ち葉を枯す。纔に残り止まる者あるも、多くは白盲青瞽の類多し。最も傷み悲しむべきは、彼の長家の先考祖家なるめり。其初め微なりし時苦寒を侵し煩暑を凌いで、許多の艱辛を喫し盡して、歳月を重ねて漸く家業を盛大にす。其盛大なるに及んで、衆民是れを選び勤めて、終に村民の長とす。此において遠近來り賀し、親眷悦び走る。是れより憍心きざし起り、俄に所々室家を補修し、門閭を營建し、新敷和襪おみかふで、衣類に付け調度に付け、次第に榮耀に誇り、華麗を好んで、家財大に費ゆ。是れより竊に邪計を廻らし、奇譚を設けて、烈敷細民を貪り掠む。細民憎み恨むと云へ共、各々堪へ忍んで、涙を含んで相隨ふ。外面は伏し隨ふに似たりといへ共、胸中の哀歎悲傷何れの處にか歸せんや。是故に民間に謎有り、云く、桶屋の正直なに、村民の長殿とはどうじや、はて村々を削り取るはさど。深山の熟柿なに、長殿の御家とはどうじや、はて人知らず果ては皆禿れて仕舞はさど。皆是れ衆民骨髓に透りて、嘆り恨みて云ひ出す底の暫時の戯言なれ共、村民の長たる人の先祖と、子孫の人々の爲めには、上も無き追善祈禱なるべし。何が故ぞ、長若しこの謎を聞いて恐れ慎しむ則は、子孫必ず相續せん。若し又乍ち仁心がを起して尋常細民を憐み救ふ心有らば、子孫日を遂ふて大に繁榮せん。左な

くば多くは彼の謎々に少しも違はず、天理に責められ、人刑にかゝつて、悲しむべし、相續し來る底の家財は盡く没却して、四壁は伐られて竈下の薪となり、境内は鋤かれて他人の田畠となり、先祖は是れより依る方なきの野鬼となんぬ。子孫乍ち断絶す。寔に淡しからざる者は村民の長家なり。去る程に仁君明主と稱せられ玉ふ人々は、何れも仁心厚くわたらせ玉ひ、御家人は申すに及ばず、遠境邊土の細民に到る迄、晝夜慈悲愛顧の遠慮を廻らせ玉ひ、最初より憍奢を制し、國家の費を恐れさせ玉ふ。奢る則は費へ多し、多き則は、苛政を好む、苛政は常に民を貪り掠む、掠むる則は人民瞋り怨む、うらむる則は其の國必ず亡ぶ。養生書に云く、氣は民の如し、民衰る則は其國必ず亡ぶ、氣盡る則は其人必ず死す。宜べなる哉、氣は一身の本元にして、民は國家の根軸なる事を。譬へば此に千尺の老松有らんに、根盤三泉に徹し、枝柯九霄を拂つて、常に千秋の翠光を籠め、遠く十里の風聲を傳へて、龍吟蛟噴るが如くなるも、日々に其本を掘り、時々其根盤を發かば、老松夫れ久しく青き事を得んや、すべからず知るべし、日々に民を惠むは、日々に其本根に培ふ者なり、日々に民を貪るは、日々に國家の根盤を發く者なり。大凡公卿より下庶人に到る迄に、工あり、商あり、巫、醫、藥師、百工の族迄に、千萬種の人類有れども、皆盡く

農民の膏油を舐て立たざる者は半箇も亦無し、民微せば我輩盡くそれ道路に餓死せんか。寔に知る、民は國家の大本なる事を。是故に豐聰皇子の如きは百姓を百の御寶と呼ばせ玉ひけるこそ有難けれ。然るに是れを貪り、是れを苦しめ、是れを惱まし、是れを害せば、千神憎み嗔り、百靈恨み睨んで、天これに下すに災害を以てし、地是れが毒算を奪ふて、武運も盡き果て、國脈必ず斷絶せん。子細に見來れば、盡く是れ酷吏の食殘より起つて、偷臣の邪計より生ず。希くは列國の諸侯、諸方の國君、無聲に聞き未形に察し玉はゞ、萬民懐く事父母の如く、敬する事神の如く、寔に延喜天曆の御代にも劣ることなく、市にうたひ野に拍つて云はん、嗟樂いかなど。

とし藻草 卷二終

邊鄙以知吾

白隱禪師

先回は、久しふりにて不慮の面謁、歡踊淺からず、増々道中御恙なく御在府の由、珍重の御事に候。老夫無難に罷在候。先つ申し述べべきは、先頃は思しめしよらせられ、大切の寶蒸一器、手づからみづから之を賜ふ。香合もまた尋常の産にあらず、感荷のあまり、取あへず香盆を莊ひ、瓶爐に蒸向す。異香ほのかに草廬に蒸徹して、梅檀の林に入るかごとく、香積の世界に遊かど怪しむ。或は且く閣下に對して談笑する心地し侍り。此にかいて寶裏し珍藏して、閑暇の時を得て、一點を挾じて物外の清閑をなむ、怡悅誰にか説向せん。是の故に此度の便りに彼の寶香に少しも劣らぬ一品高麗に備へ度、彼方此方見まはし、立ちまはき侍れど、御覽の通りの野外の草廬、茄子さ、げの外、夕顔のひねくりまがりたるど、冬瓜のぶらど下がりたるどのみ。あまりせんかたなさに、種々工夫の中、先頃の御仰せに、近き頃はめつらしき假名物や書ける、然るべき法語や出來たるどの御尋を去風存し出し、究竟の事こそさんなれど、叶はぬ例の田舎文章にて、賤の緒環くりかへし、片腹



いたく思はんも恐れあれど、仁政の一助にもなれかしの寸志ばかりに、「へびうち」と云へる假名物一篇書綴り、進覽いたし侍り。蓋し蛇覆盆子は、花も實も有りながら、春蘭秋菊の薫もなく、黃祇砂參の藥能もなし、桂姜の温にあらず、苓連の瀉にあらず、神農氏の聖願にもれたれども、近頃伊若水か本草には載せたり、列聖叢中尤も鄙賤の小草なる物をと、此法語に名けたる事は、蛇覆盆子にも劣らぬ鄙賤のこの葉草なるを、卑下の心なるあり。若し又或は邊鄙以知吾ならば、少しきは御政務の一助ならんか。然るに法語は古來參禪見性の指南。かな物はおほくは勸善懲惡の旨趣。勸善に急緩あり、見性に精廉あり。一國一城の主たらむ人は、第一に王位を守護し、萬民をやすんせむかために保重す。邦家を保重せんとならば、先づ須らく生民を愛顧すべし。民肥へ國ゆたかなる、是れを強國といふ。強國の主として王位を守護せんとならば、先づ須らく身軀健康に壽算延長なる事を計るべし。若し夫れ多病短壽ならば、何の暇有りてか帝都を守護し、邦家を治め、生民を愛顧する事を得んや。身軀健康長壽を得んとならば、飲食を節にし、人欲の私を制して、養生の至要を求むべし。養生の至要は、眞醫を近け、内觀と信力を並べ備へて、武軍を養ひ玉ふべし。殊更一方の大將たらむ人は、強敵をしたかへ、帝都を守護し、萬民を安ん

する大役なれば、常に信心堅固にして、武運を養ふを以て第一とし玉ふへし。去る程に源家の御先祖八幡殿の如きは、常に普門品念らせ玉はず、常々の御仰せに、武運を養はんす。武士は、物の命は狼にとらぬ者なるをぞとて、人は申すに及ばず、虫虻の類までも、むざと殺し玉はざりける故にや、飽くまで武運も強く、御威徳も勝れさせ玉ひけるにや、南都北嶺の貴僧高僧も加持しあぐみたりける、天子の御惱を、弓のすびきして弦音にて掻き拭ひたる如く治し奉り、一とせ征夷大將軍の勅宣を蒙り、一寸八分の大士の金像を御髻の中に結びこめおかせ玉ひ、唯一人奥州に發向させ玉ひ、目にあまりたる大敵を易すくと追ひなひけ、貞任を打取り、宗任を生捕り、奴僕の如く召仕ひ、至尊の宸襟を休め奉り、美名を千載の後までに傳へ玉ふも、信心堅固の威徳なるべし。坂上の田村丸、大悲の弓に智慧の箭の威力に依て、手前もあらずして易すくと鈴鹿山の惡鬼を亡し。其外右大將頼朝、主馬の判官盛久、惡七兵衛景清、楠兵衛正成、多田の満仲卿の如きは、信力厚くおはして、老來六角堂において念誦せさせ玉ひけるに、汗と涙と御齒を打ち透しける由、未代の未練不覺のうつけ武士の曲まがに、如何にやさもしげに觀音杯の力ちからをかる事のあるべき、手前相應に生れつきたる力なれば、他力のたすけに預る事はなきとよなど、いかめしげ

にわめき廻れど、すはの大事の御所になりては、人先に遁げ竄れて、先祖の武名をけがし腐すは、尋常こざかしく口利かて、俵立する大不覺者の常の業なり、奥の手なり。良將は安に居て亂を恐るゝと申す事の侍れは、片時も武術を怠らせ玉はで、貴體勇健に目出度國家を憐みすくひ、仁澤を千載の後までに残しつつたへ玉へかして祈るはかりに侍るからに、先頃見參の刻、密に勸めまゐらせんと存じ付き侍りにたれど、草卒の仕合本意に任せず、此度の幸便に延命十句觀音經と申すを誂へ、進覽致候。此經は、大唐日本の間において奇妙の靈驗是れある經にて、文句も短く侍れは、閣下は申すに及はず、近侍衆中迄も毎日二百返程宛讀誦せられよかしの寸志斗りに候。仔細は物の試しに侍れは、重病かまたは不慮の災難に逢はれ候人々に御あたへ、慰に御覽是れあるべく候。眞實にさへよみ侍れは、驚入りたる靈驗は必定決定是れあり。第一の調法は、此經を讀誦する人は、至極無病にて長壽をたもち候、誰々にも相談致度物に侍り。扱て此經を保つ者は、場所を擇ばず、時節を嫌はず、馬上にても枕上にても、行住坐臥の間において、間斷なく唯讀み得るを貴しとする由。何程御用しけき奉公人衆にても、自由に勤めらるゝ事に侍ると、別して御家中の老人達に逐一御あたへ被成候と、御家中上下の祈禱に罷成り、閣下廣大の徳行に罷成る事

に侍り。衆善奉行、諸惡莫作は、諸佛の通戒にて、善事ならば、假初の事にても人は告げず勸めずとも取かゝり、すておかす相勤め、惡事ならば、芥子斗りの事にてもおつと思ひ切り、二度行せざる、是れ一切の戒行を保つも同斷の事に侍り。昔し漢土に高皇と申す者、常々信心なる者なりけるか、如何なるしおちやは有る、既に誅戮にきはまたりける前の夜、親切に觀世大士を念し申しけるに、夜半ばかりに大士の尊容目のあたり出現せさせ玉ひ、夜中に觀音經千卷讀み得たらましかは、命はたすけ得さすべきすと御告ありしに高皇申さく、もはや夜半にて侍る者を、如何にや千卷までは讀み得侍るへきと。然らば此經をよみてよとて口づから授けさせ玉ふ。翌日誅せらるゝに當りて、太刀鏢元より折る、外の太刀を取かへけるに、三腰までをれてければ、檢使驚き立寄り、仔細やは有るとたつぬしかくゝの様をかたりにたれば、扱てはとて赦るさる。それより此經を高皇觀音經となつく。しかりしより以來、信仰し讀誦する人、僧俗男女をあらはず、或は難病を治し、或は災難を遁れ、剩へよむ人必ず長壽を得。閣下もまた行住坐臥の上において、毎日二百返程宛讀ませ玉ひね、仔細は武家も出家も無病息災にて壽命長からでは、諸道成就する事かたし。殊更一方の大將たらんず人は、天下の大事有らむ時に、六韜を旨とし三軍をしたか

六  
へ、西戎東夷を嫌はず、南蠻北狄を擇ばず、踏込みかけ入り、逆徒を碎き朝敵を挫ぐ事  
大斧を搦つて枯木を劈くが如く、威雄を八蠻の外までに震ひ、聲價は四海の中を動して、  
帝都を守護し、萬民を安んずる大任なれば、晝夜に怠らせ玉はで、武術を精鍊し、内觀と  
信力と兼勤めさせ玉ふ内にも、此經を讀ませ玉はゞ、自然と佛神の加被力に依て、武運も  
強く、御壽命もなかく、氣宇寛大にして、國家を治めさせ玉ふ事、順水に舟を棹すか如け  
ん。古より家のみだし國を失ひ、身を亡すべき愚將は、武運を養ひ、仁澤を施し、萬民を  
憐みすくひ、國家を治る等の大事は存しもよらず、身上にも似合はず憐奢に誇り、美態を  
好み、百石の所領にして千石の羽振をなし、千石の所領にして萬石の威勢を張り、武士に  
も似合はぬ綾羅絹布を目ざましく着かざり、男女室に有るは人の大倫なりとて、一人にて  
すむべき妻女を五人も召しかへ、媚にほこり寵を恃んで、内證は嫉妬妬害に一日も靜な  
る事なし。益なき錢財を費し盡し、領内の百姓を非道にむさぼり掠め苦しめ、酒色におぼ  
れ、筋なき遊藝亂舞に貴き精心正意をとりみだし、身體は日々に衰へ瘁け、果は種々難治  
の重病さしおこりて、身命もまた保ち難きに到る。皆是れ定めてそなへたる明徳を、淺狹  
しき人欲の私に蓋ひ奪はれ、主心つゝに定まる事なきの致す處なり。後の世の報ひまでお

もひやられておはれこそ覺ゆれ。千日養はれて一朝の急を救ふは、武士の習ひなる物を、  
常に美ふくにともなひ、美酒をのんでえしれぬ遊藝に耽り、軍馬の調鍊は夢にもしらす、  
武藝は拙く弓箭は手馴れず。若し夫れ國家の大事有りて、火炮を飛ばし戈戟を列ねて、兵  
刃已に交る時に當りて、日頃習ひおかさる御經は、齋佛事有りて俄には讀まれぬ如く、  
何の備へ有りてか一支もさゝゆる事を得んや。重代高恩の主君は敵陣に取かこまれ、乳哺  
深恩の父母は雜兵の手にかゝつて責め辱らるれども、かへり見る事さへ叶はで、ひた震へ  
にふるへて、肌脊なる馬にはひのりて、あてともなく遁け走りて、笑を千載の後までに殘  
す事は何ぞや。是れ唯だ尋常武備を怠り文術を好まず、仁恕の道の貴きは露かへり見る事  
なく、武運を養ふ事の大事は夢にも知らず、油斷不覺の致す處にして、主心片時も定る事  
無き者のなれの果てなり。國を守り家ををさむる事、縱令彭祖か八百の歳華を保つも、暫  
時の夢中の戯なる者を、福貴を特み權勢にほこりて、財帛を見る事は泥沙の如く、生民を  
見る事は土塊の如く、追從諂戀の佞臣を近け愛し、忠諫潔白の賢臣を思み遠け、飽き足れ  
もなき賦税を貪り掠め、罪もなき物命を苦め害し、果しもなき罪障を積み重ねて、死後に  
は果して三塗八難の惡處に墮す、寔に恐るべし。古來明徳至善の君子、仁澤を天下に施さ

んと企て玉ふとき、最初に専ら仁吏を選び用ひ、酷吏を恐れ避け玉ふ事は何らや。酷吏の國祚を害し、國脉を斷つ事、鳩羽一片、河水に投じて、魚鼈皆斃れ、水銀一滴、木根に入つて、松柏俄に枯るゝか如し。酷吏は、代々先君の宗廟をして荆棘の野となし、狐兔の栖家とす、憎んでも惡んずべきは酷吏なり。酷吏は、代々先君の神靈をして祭奠なきの關神とし、依る方なきの野鬼とす、恐れても惶るべきは酷吏なり。是の故に明君聖主は、酷吏を忌み棄て玉ふ事、屍穢の如く、酷吏を憎み遠け玉ふ事、糞汚の如くす。暴君暗主は、専ら酷吏を貴び用ゆ。所以に云ふ、聖主出て酷吏ひそみ、暗君立て酷吏眉をひらくと。吏は作モ座なんぞ胡爲の者とかするや。彙に曰く、吏は民を治る官なりと。異に曰く、吏は民を惱す官なりと。蓋し吏に仁吏あり酷吏あり。仁吏は常に民の利害を考へ、土の濃瘠を察し、稼穡の艱難を憐み歎き、凶年饑饉には、賦税をはふき使役を寛めて、民をして飢凍にくるしまざらしむ、國祚を堅剛にし、君をして苛政のそしりを千載の後までにひかさらしむるを以て已か急務とす。是の故に生民之になつく事、爺孃の如しと謂つべし。民を治る官なりと敬しても敬しつべきは仁吏なり、仁吏は寔に用ひつべし。酷吏は大に是れに反す。蓋し酷吏とは刻剝の義なり。民を貪り苦しむる事刻むが如く、財産をかすめ取る事剝くが如し。酷

吏は歳の凶豊を管せず、民の凍餒をかへりみず、徒に自ら奪ひ貪るを以て已か忠節とす。昔人は是れを聚歎の臣とす。其奪ひ盜む事の智、君子に過ぎたり。是の故に云ふ、聚歎の臣あらんよりは、寧ろ盜臣あれといへり。賄賂あるの訟は、水に石を投ずるか如く、賄賂なきの訟は、石に水を投ずるか如し。譬へば張三と李四とともに争ひ訟る事あらむに、其初め理非を分たず勝敗を辨せず、混然として日を重ね。張是れを愁ひて竊に寄する事有るときは、李か空處を探りて少しく是れを問す。李大に驚き恐れて、ひそかによする事あるときは、又張か空處を捉へて少しく是れを問す。張李互に驚き恐れて、代るゝ相寄すと云へども、金銀辨せず、玉石分たず、或は五年或は十年寄せくして、遂に財盡き力究りて一向寄する事能はざる者を捉へて、終に是れを負處に推す。是の故に民の酷吏を恐れ憎む事、惡虎の聚落にあるか如く、疫鬼の國中に流行するに齊し。往々に世の邦君國主、夢にも是れを知り玉はず、自らおもへらく、國豊に民やすすと、いつしか君を桀紂の類にし、民を桀紂の民にすと謂つべし。吏は民を惱する官なりと憎んでも惡んずべきは酷吏なり、昔し秦、僞奢を恣にし、威權を恃んで咸陽の高臺を築き、阿房の廣宮を構へて大に誇る。是の故に財用足らず、俄に酷吏を放つて天下の財利を奪ふ。倉庫みてもあふる、生民いかり

うらむ。久しからずして天下大に亂る。咸陽やふれ、阿房燼す。桀紂幽厲の暴君暗主、各々酷吏を愛しもちひて、民をして塗炭の中にくるしませしむ。果して四海の富を失ひ、萬乗の貴階を下る。元祿の初め、中國の内何某の侯の家に酷吏あり、大に民を貪りかすむ、生民悲しみ哭す。村民の長たる者あり、争ひいさめて利害を説く。酷吏大に嗔り憎んで、竊に侯に訟へ讒して、彼の村民の長を誅す。長誅せらるゝに及んで、天を仰ぎて長歎して曰く、我若し罪の誅せらるへき有りて、我を誅せば則ちやんぬ。若し又罪無くして我を誅せば、爾君侯かならず三年の活を得ん。國脈必ず三年にして斷絶せん。爾が輩これを見よと云ひ舉つて死す。この時天色朦朧として草木慘然たり。誰か計らん、其侯未だ百日を経ざるに、乍ち心痛の重病を發せんとは。百藥す功なく、針灸しるしなくして、衆醫手をつかねて終に死亡を見る。一城大に慟哭す。嗣子四歳なりけるを傳奏處へ奏し願ふて、家督を繼かしめんと家中の古老相添ひ、はるかに武陵に越く。着府いまた日あらずして、是れ又俄に早世す。悲むべし、十萬石餘の大家、乍ち根をたち葉をからず、數千人の家中、老幼尊卑東西に分離し、南北に奔波して、一城乍ち空墟となんぬ。寔なる哉、天將に雨ふらむとする時は、山色必ず近く。國將に亡びんとする時は、民間先づくるしむと、是れ彼の嚮きに

謂はゆる酷吏の國家をみたり、國脈を斷する現證なり。後來寶永丁亥の春、予行脚して錫を城下に留む、一日持鉢の序、道友三五輩と共に彼の疾師檀の寺に入りて、後先君の宗廟を見る。香華久しく道たえて、鬼哭し神悲むに似たり。各額を擽めて嗟悼して云はく、嗟已哉、唯是れ一箇酷吏の苛虐より起りて、終に此蕪荒を見る。一國の君、一城の主たらむ人のおそるべきは酷吏なり。是れ即ち向きに謂はゆる酷吏は、代々先君の宗廟をして荆棘の野となし、狐兔の栖家となし、酷吏は代々先君の神靈をして祭奠なきの閑神となし、依る方なきの野鬼となすの現證なり。譬へは此に賊臣有りて、秘計をめぐらし奇譚を設けて其國を亂し其家を破り其君を害し、其群臣をして東西に分離せしめ、つひに其國脈を斷たんと計らは、閩國人嗔り憎んで、鼓を鳴らして是れを責めて、油にて煮、牛もて炙くと云へども、飽き足る事無けん。殊に知らず、酷吏は寔に是れより甚しき事を。然るを是れを愛し、是れを用ひは、國うれ久しからざらむか。寔に危きかな。時に一僧あり、勃如として頭を掉つて云はく、否なり、酷は奢の影なり。奢は聲の如く、酷は響の如し。予か云はく、何といふ事そや。原ぬるに夫れ暗君國を得るときは必ず奢る。奢るときは、多くは妃嬪を列ね、嬖嬖を聚む。あつむるときは財用足らず。たらざるときは、百端を究めて是れ

を求む。財の物たる木についても求むべからず、水に就いても得べからず。こゝにかゝる酷吏の尤げき者を擇んで。是れを民間に放つて、民の財利を掠め奪ふ。奪ふ事烈しく、得る事の多きを愛して、以て賢なりとし、以て忠節なりと稱して、是れに賜ふに爵を以てし是れに授くるに官を以てす。此において吏族大に眉をひらきて、飛廉が肩を曠らし、惡來か臂を張り、王莽か眸を凝し、董卓か頭を掉つて、賦税に事よせ、官祖になぞらへ、民の穀帛を掠め奪ふ事、枯骨を絞りて汁を熬むるか如し。此に於いて國衰へ民疲る。冬暖かなれども、兒は凍へたると號び、年登れども、妻は飢へたりとなく。而して後に衆民盡く恨み背く。そむくときは、其國必ず天禍あらざれば人刑あり、國夫れ久しからざらむか。所以に云ふ、鳥の將さに死なんとする時、其鳴く事悲し、國の將さに口を吐くとする時、其食る事烈しと。寔に恐るべし。吏もまた宜しく自ら計りて恐れ慎むべし。君侯の威權を借りて狼に民を惱害し、狼に民を掠め奪ふ。大凡仁義あらん武士の假初にも爲すべき業かは。恣れてもあるべき事かは。嗟夫れ你の後を如何。豈に獨り佗の國祚を害し、他の國祚を斷ちて、而して後に徒らに休する者ならんや。自家もまたかならず爾の繼嗣を斷たんか。豈にそれ爾の繼嗣をたつのみならむや、人の臣として君の國家を亂る。不忠是れより甚しきは

なし、人の臣として君の國祚を害す、罪過是れより大なるはなし。死後には必ず惡處に墮して、俱底恒沙の苦患を受け、火血刀の辛酸を嘗めん。つらくおもふに、侯吏品殊に、尊鄙事異なりと云へども、誰か其祖宗なからん。若し其果して祖宗あらば、各泉下に在りて爾か官吏にうつるを見は、必ず大に啼泣してみん。焦穀芽なく、酷吏後なし。我輩久しからずして必ず祭奠なきの開神となり、依る方なきの野鬼とならむ。嗟願はくは仁吏なれば、酷吏となる事なかれど。おもふに仁酷並ひ立つといへども、否泰はるかに霄壤なり。大凡世の吏たる人の後を見るに、仁吏の種族は後來必ず盛大なり、酷吏の部類は向後多くは郎當して道路に餓死す。四十年前、何某處役所に酷吏ありき。人民大に憎み恐る。久しからずして人刑有りて俄に其職をはがれ、改易されて牢落す。父は和樂をうたふて街市に袖乞ひし、子は戰書を読んで人の門閭に立つと語り了つて慘然たり。或人の云はく、酷に兩般あり、剛はゆる奢と貪となり。奢より出る者は公なり、貪より出る者は私なり、私は多く公は少し。公は恐るゝ處なし、公然として是れを奪ふ。私は恐るゝ處多し、必ず密に村民の長を語らひ、志を同じ計を定めて、官命なりと稱して恣に貪り掠め、日々に奪ひ月々に掠めて、終に其利を二つにして吏と長と是れを分つて、公は預らず。是の故に長家は日々

に繁興し、康藝か高厦を構へ、石崇か堂裏に坐す。竝歌遠く傳へて戰車轟き鳴る。細民は日々に衰へ、月々に悴けて、妻孥もまた養ふ事能はず、家々に苦しみ哭し、戸々に衰へ悴けて窮餓相煎す。野に菜色おほく怨恨内に逼りて、死亡もまた顧みざるにいたる。こゝにかいて或は二萬或は三萬、蟻の如くにあつまり蜂の如くに起つて、恨み叫んで先づ彼の長家を圍んで、門閭を破却し、家財を粉碎す。若し彼の長を捉へば、かならず裂きて食はんとす。其勢ひ折くべからず。果ては城中に込み入り狼藉せんとす。此において領内の寺院を備ふて、だましすかして是れを治む。靜謐の後ひそかに狗をまはして、其張本を探り捉へて、或は二十或は三十、或は磔し、或は誅して、爛骸野にあまねし。特に知らず、張本は民にあらず、却て吏と長なる事を。たとへば此に細民有りて、五箇三箇伴を結んで、遠く他國へ行かんに、他國の民若し其候を指して、或は罵り或は謗る事あるときは、細民大に嗔り叫んで、打果す事もまたかへり見す。諸國の民皆然り。吏若し先代の仁吏に倣ふて、年の凶豊を考へ、民の否泰を察して、上下利を同じ、尊卑苦樂を共にせば、國君に對して豈に此凶態あらんや。窮鼠却つて猫を咬むと云はんか。然らば則ち張本は民に非ず、吏と長とに非ずして何ぞや。古に云はく、財散るときは民聚り、財聚るときは民散すと。民散す

とは、家民恨み背きて老いたるを負ひ、幼きを携へ、啼泣して境を越え、他國へ走るを云はす誰らず、境をも越えず、他國へも行かざれども、一民心疎み離る。是れを民散すと云ふ。民聚るとは、衆民悦び慕ふて他國を離れ、軍食需贖して我國に來り聚るを云ふにあらず。民心悦ひ懐く、是れを民聚ると云ふ。國君仁徳有りて、萬民を憐み救ひ、酷吏の聲を忌み遠け、膏粱も民を貪り掠めざるときは、衆民悦ひ懐き、市に詣ひ野に拍つて云はく我侯願はくは疾病なからんか、我侯願はくは萬歳なれや。此君の爲めにならば、白刃をも踏まんずべし、黒火にも投しつべし。我侯願はくは萬歳なれやと。民心斯くの如く貴ひ懐く、是れを民聚ると云ふ。若し又國君貪欲にして、専ら酷吏を貴ひ、民を貪り掠め苦しめ、金銀を夥しく貯へ納め、國家を困窮せしむるのみにあらず、左右の近臣までも逼迫せしむ。此に於いて家民恐れ憎む事虎の如く、恨み背き、嗔り罵り、市に哭し野に悲んで啼く。願はくは仁人あれや、願はくは競ひ來りて文武の紂を討つか如く、劉項の秦を破るか如く、吾境に入り、吾國を領し、我國を治め、我國を靜め、逐一酷吏の聲を誅し、吾輩を救ひ、我輩を蘇せよ、我輩をして且暮を安からしめよ。嗟願はくは仁人あれやと。天に訟へ神に祈る、斯くまで人心離れ背く、是れを民散すと云ふ。つらくおもふに、世に羨しからぬ者

は、村民の長家なるめり。五十年來、予か西東二十里か内、村民の長たる家、大凡數百家の人々の末を見るに、多くは郎當落魄す。其中少しも衰減なく相續しもて行く者、纔に八九家、是れは定めて勅役中少しも食り掠むる事なき善き人々の後なるべし。其餘は多くは根を斷ち棄をからず、纔に残り止まる者も、必ず白盲青瞽の類多し。尤も傷み悲むべきは、長家の先考宗祖なるめり。其初め微なりし時、苦寒を侵し、煩暑を凌ぎて、許多の艱辛を喫し盡して、歲月を重ねて、漸く家業を盛大にす。其盛大なるに及んで、衆民是れを撰ひ勤めて、終に村民の長とす。此において遠近來り賀し、親眷悦び走る。是より驕心きざし起り、俄に所々室家を修補し、門閭を營建し、新しき和襪踏みかふて、衣類につけ、調度につけ次第に榮耀に誇り、美麗を好んで、家財大に費ゆ。是れより竊に邪計を廻らし、奇譚を設けて、烈しく細民を食り掠む。細民憎み恨むといへども。各堪へ忍んで涙を含んで相隨ふ。外面は伏し隨ふといへども、胸中の哀歎悲傷、何れの處にか販せんや。是の故に民間に謎あり云はく、桶屋の正直なに、村民の長殿とはどうじや、村々を削り取るはさて。深山の熟柿なに、長殿の御家とはどうじや、人知らず果は皆つふる、はさて。是れ皆家民骨髓に徹して、憤り恨みて云ひ出す暫時の戯言なれども、村民の長たる人の先祖と、子孫の人々

の爲めには、上も無き追善祈禱なるべし。何か故ぞ、長若し此謎を聞きて恐れ慎むときは子孫必ず相續せん。若し又乍ち仁心を差起して、尋常細民を憐み救ふ心あらば、子孫大に繁榮ならん。多くは彼の謎々に少しも違はて、天理に責められ、人刑にかゝつて、悲むべし、相續し來る底の家財は、盡く没却して、四壁は伐られて、竈下の薪となり、境内は賜かれて他の田畠となり、先祖は是れより依る方なきの野鬼となんぬ。子孫乍ち斷絶す。寔に羨しからぬ者は、村民の長家なり。昔し漢土に羊祐と云ひし人、襄陽と云ふ處の刺史なりけるか、天性仁慈心厚くおはして、常に酒色を遠け、費を制し、其餘を散して以て窮民を安撫せられければ、國家富み榮えたりけり。萬民其徳を感して、羊祐遠逝の後、峴山に石碑を立ておきけるに、其邊を往來する國民、おし拜みて感涙を落しける故、今の世に到るまで墮涙の碑と稱し、したひ悲むとぞ申傳へ侍り。三國の時、西蜀の關羽將軍と申すは荆州と云ふ處の刺史なりけるか、純朴を常とし、驕奢を禁じ、儉約を守り、浮費を制し、天性王佐の才をそなへ、賦税を軽くし、聚歛を遠け、生民を撫育し、毫釐も民を食り苦しめ玉ふ事なかりければ、荆州の民懐く事父母の如く、敬する事神の如し。將軍遠逝の後、民其徳をしたひ、大社を營み、關將軍の廟と稱して、祭奠怠る事なし。一日も民の父母た



らんずは、羨むべきの芳蘭なり。去る程に仁君明王と稱せられさせ玉ふ人々は、仁心厚くわたらせ玉ひ、御家人は申すに及ばず、遠境邊土の細民に到るまで、晝夜慈悲愛顧の賢慮を廻らせ玉ひ、最初に驕奢を制し、國家の費を恐れさせ玉ふ。奢るときは費多し、多きときは苛政を好む。苛政は常に民を食りかすむ。掠むるときは人民嗷り恨む。恨むるときは其國必ず亡ぶ。養生書に云はく、氣は民の如し、民衰ふるときは國必ず亡ぶ。氣盡るときは人必ず死すと。宜べなる哉、氣は一身の本元にして、民は國家の根軸なる事也。譬へは此二千尺の老松有らんに、根盤三泉に徹し、枝柯九霄を拂つて、常に千秋の翠光を籠め、遠く千里の風塵を傳へて、龍吟蛟喚るか如くなるも、日々に其本根を堀り、時々其根盤を發かは、老松それ久しく青き事を得んや。須らく知るべし、日々に民を惑むは、其本根に培ふ者なり、日々に民を食るは、日々に國家の根盤をあばく者なり。大凡公卿より下庶人に到るまでに、工あり、商あり、巫醫、樂師、百工の族までに、千萬種の人類あれども農民の膏油を舐りて立たざる者は、半箇もまたなし。民微りせば、我輩盡く焚れ、道路に餓死せんか。寔に知る、民は國家の大本なる事を。是の故に豐聰王子の如きは、百姓の百の御寶とよばせ玉ひけるこそ有難けれ。然るを是れを食り、これを苦しめ、これをな

やまし、是れを害せば、千神憎み嗷り、百靈恨みにくみて、天此に下すに災害を以てし、此か毒算を奪ふて、武運も盡き果て、國脈必ず斷絶せん。子細に見來れば、盡く是れ酷吏の食殘より起つて、偷臣の邪計より生る。悲むべし、列國の諸侯の諸方の君子、夢にも是れを知り玉はず、常に自ら謂へらく、國泰民安、寔に延喜天曆の御代にも劣らすと。嗟危きかな。

然るに大樹神君の如きは、あくまで仁徳厚くわたらせ玉ひ、民を憐み天下を愁ひさせ玉ふ事は、大凡漢士にて聖人君子と稱せられ玉ひにたりし人々よりは、遙に勝れさせ玉ふとこそ覺ゆれ。常々の御仰せに、善政を天下に施さんとならば、忠諫廉直の賢臣を近づけ用ひ、追從輕薄の佞臣を遠ざけ棄て、朝暮に萬民の凍餒を畏れ、稼穡の艱難を憐み愁ひ、武術を怠らざるを第一とすべし。脈を取つて死生を知るか如し。驕奢の國王は必ず食り、貪欲の國家は必ず亂る。武家に武道のためは、即ち一身の死脈を知るべし。民を食り苦しめ、ひたすらに身の榮耀のみ好むは、唐の太宗は、民はわれと同體なる者を、是れを食り是れを苦しむるは我股をさきて、我腹をこやすか如しとたとへられたり。縦ひ腹は肥えたりとも、股の肉盡きなは、我身立つべきやは。安きに居て危きを忘れず、治に居て亂を恐るは

名將の習ひなれば、晝夜に怠らず、武術をばげみ好んで、油断なきを家業とすべし。毫釐を争ひ、賦税をしほり取り、民のしゝむらをそぎ落して、金銀に仕かへて、公義の藏へをさむるを忠節なりとす。不忠是れより甚しきはなし。忠節とは、善き者を勧め上げて、主人に用ひさするを肝要とし、慈悲を萬の本として民を憐み、諸人安堵して、其國治る様にするを、第一の忠孝とはするやと仰せられたり。近頃、不慮に神君の御遺訓を披覽し奉り、且つ驚き、且つ喜ぶ。誰か計らひ、大樹神君、斯くまで仁徳厚くおはして、聖知斯くまで優に渡らせ玉はんとは。仁政の美、治世の式、三台四海を照し、五緯中央を鎮して、天下を泰山の安ぎにおく、寔に漢高四百年の洪基にも越えたり。開闢より以來、比類こそおはせぬ。如何様是れは尋常にてはよもおはさじ、法身意生の佛菩薩の、未代の衆生を憐ませ玉ひ、かりにしばらく宰官の身を現じ玉ふにやある。大凡漢家にも本朝にも類なき寶訓、六經にも勝り、論孟にも過ぎたる金言なりとこそ覺ゆれ。纏に百紙に足らぬかな物なれども、當時日本の武士の爲めには、如何なる海藏龍宮の金文にも勝れ、諸史百家數萬卷の書籍にも越えたり。詮なき史記や左傳を讀み覺えて、物知りだて玉はんより、家を治め身を治むるには、此書に過ぎたる事や有るべき。一國一城の主たらむ人々は、朝夕の看教誦經

の代りと思ほしてよみ玉へかし。此書を買ひ讀まんす國は、神明とこしなへに鎮護し、佛陀も擁護の陣をたれ玉ひて、其國必ず水旱疾疫の災難なけん。殊更當時泰平の御世には、一日も欠ぐべからざる金文なり。此書を買ひしたかはんす國は、其國必ず繁榮ならむ。兒孫かならず久長ならむ。此書にそひき隨はざらん國は、其國かならず災害あらん。國脉必ず久しからじ。惜むべし、此書の空しく古紙堆中に有る事。譬へは和氏の璧、照乘の美玉の泥土の底に有るか如し。彼の連城の美玉の如きは、千顆萬顆つみかさねたりとも、立處に國を利し民を救ふ事、此書の方に及ぶべき事かは。天下泰平、御世長久の祈禱のために、此書に過ぎたる經陀羅尼は、是れ有るべからず。武士にも似合はぬ長經長念佛し玉はんより、此書を買ひよみ玉は、現當二世の利益を得玉ふべきや。如何なる金持たる後世者もあれかし、梓に命じて此書を繕し、普く世間に印施し、取分け武士たらんす人々の讀み玉ふ様にせまほしき事よ。然らば則ち如何なる堂塔伽藍をおひたし、しく立てひろけたるより、廣大の善根なるべきや。沙門釋氏は吾々の先祖の佛の説きおかせ玉ひたる御法なるはとて、朝夕に讀誦する如く、當時の日本武士の爲めには、佛神にも先祖にも神君に越えたる事や有るべき。然らば則ち人々の貴ひ玉ふべきは、第一に此書にあらすや。武士にも

限らず、萬民にもかぎらず、出家沙門乞食法師の類までも、堯年舜日の恩澤に預る事は、大樹神君、慈悲を萬の本とし玉へる萬古不易の善政の威徳ならずや。幸なる哉、かな物に書い留めさせおかせ玉ふこそ有難けれ。如何なる不文字大才なる武士も法師もよみえ易く、一向讀み得る事叶はぬ農工商の類は、家々の持佛堂に一卷宛納めおきて、朝夕におし戴きたらんには、上もなき家内安全の祈禱なるべきぞ。人あり必ずみん、鶴林俄に此書を讀して六經にも越えたりと、何ぞ考へざるの甚しきや。此漢必ず諂ひ求むる處あらんと。若しそれへつらひ求むとならば、奇譚妙算、百端千端、何ぞ必ずしも此書に限らむ。予もまた竊に諸君の考へ玉はざるの甚しきを笑ふ事あり。譬へは良醫の藥を調合するか如し。纒の木通一味なれども、便道などとしつまりたる十死一生重病難治の人のためには、附子人參黃耆砂參も及ばざる奇功を發する事あらむ。此時人々賞嘆して、木道は附子人參にも勝れたりと云はんを考へざるの甚しきと云はんや。此書の如きは、今の世の人附子參なる事を知らずや。諸君何ぞ考へ玉はざる事の甚しきや。縱令又邪計を設けて、諂ひ求め得るも、命日既に帷幄に通る、果して何時をか見んや。予か如きは、寔に細田の稗史なれども、世を利する心なきにあらす。縱令世を利する心あるも、薄福暗短、此書の力に及ぶべきかは。是の故

〔大阿〕は名劍の名。  
〔玉炬〕は夜光の玉。

に其人を見て此書を讀す。此書若し一國に行はれば、則ち一國の大幸ならんのみ。をしむべし世に劍を知る人なければ、大阿も凡鐵に混する事を。後來必ず此書の世に行はるゝを見て、悦び敬する事、玉炬を夜途に拾ふか如く、南針を霧海に得るか如くなる者あらむ。後來此書の世に行はるゝを見て、憎み恐るゝ事、瘦鬼に狭路に逢ふか如く、惡虎を幽谷に見るに齊しき者あらん。如何にや、人の君たると人の臣たると、此書を悦び敬せざる者の有るべき。如何にや、人の君たると人の臣たると、此書を憎み恐るゝ者の有るべき。云はく、此書を敬し、此書を悦ぶは、禹湯文武の明主、周公召奭の賢臣。此書を恐れ、此書を憎むは、殷紂夏桀の暴君、趙高季斯の賊臣、秦火もまた計るべからず。昔し秦苛政を恣にして、趙李其政柄をとる。貪歛劫奪、大に聖賢典に違す。違するときは、謗を千載の後までに惹かん事を恐れて、儒を抗にし、書を焚く。唐武暴逆にして、甚だしく因果を嫌ふ。僧の因果を誦くを憎むで其衣を民にし、其居を廬にせしに齊し。後來世の俊臣賊士の如きは、此書の世に行はれん事を憎んで、必ずみん苟くも吾か大樹神君、明德至善の遺言、豈にかろくしく世間に流布して、鄙俗の手に觸るゝ者ならむや。唯是れ十重に包裹してて文庫の底に納め藏して、人をしてみだりに披覽せしむべからずと。若し果して然らば、吾

か十力調御の如來の如きは、種姓は即ち五印度の主、淨飯大王の太子、威徳は是れ即ち三界六趣の教主、梵釋尊を合せ、龍天是れを戴く、尊貴は大凡是れより盛なるは有るべからず。然るに其所説の經卷、民間を悉らばず、市鄘をすてず、只其流行する事の普わからざらむ事を恐る。是の故に卷をひらけば、多くは流通分を見る。奴隸僕御の輩といへども、或は手に觸れ、或は讚誦するを以て貴しとす。此書の世を利し民を救ふ事、荒旱の膏雨の如く、野渡の船筏に過ぎたり。慈悲を萬の本として、菩薩の不行に齊しき神君、豈にその利益の廣きをいとひ玉はん。然るを是れを秘し、是れをかくして、空しく鱸魚の腹の中に葬られば、かならず神君の冥慮に達せんか。當時天下の武士たらむず人、神君の冥慮に達せば、不忠是れより甚だしきは無けん。貴國は御先祖より數代以來、仁惠或は徳あつくおはして、仁慈恭謙の君子多く、忠勇廉潔の人傑足りて、各王佐の才を備へて、代るく仁政を輔け佐く。此において國肥へ民純にして、農に餘あまんの粟あり、婦にあまんの布有りて、綏に境に入れは、山光水色、俄に觀を改め、遠は近里、祥煙列り浮ぶ。謂つべし、東海の君子國なりと。是の故に苛政の謗を終に世間に惹き玉はず。熟らくおもふに、閣下もまた宿福厚くおはして、かゝる目出度仁義の國の大守と生れさせ玉ふ事、前生多少戒徳の致す處な

り。猶々恐れ謹ませ玉ひ、宿昔萬善萬行の廣福をつかひつくして、罪障業苦の惡因に仕かへさせ玉はぬ様の御心掛、肝要に候。誰か計らむ、今生の天子、將軍、大名、高家等の福貴自在の人々は、盡く是れ前生多少の後世者達の、淨土に生れん、佛にならんと。兩生三生、難行し、苦行し、持齋し、持戒し、讚誦し、書寫し、種々精神を苦しめ盡し玉ひにたりし貴僧高僧及び一切の修行者達の再來し玉へるならむとは。縱令三界の秘密を行じ盡したりとも、見性の眼ひらけず、菩薩の不行を行せざらん限りは、成佛はかなひかたき事なり。然れども前生多少萬善の功勳空しからず、尊貴高位福貴自在の身に生れ、隔生即忘れて、宿昔の菩提慈善の志は忘れ果て、福貴を恃み威權にほこりて、生民を苦しめ、賦税を貪り、際限もなき惡業をつみかさねて、死後には、必ず惡處に墮す。此の故に云ふ、癡福は三世のあたなりと。兎にも角にも政務に御錯りなき様、第一の謹なるを御覺悟是れあるべく候。縱令何れの國主なりとも、仁澤を施し、生民を憐み恵み玉ふ事は、力及はずとも、華奢を禁じ浮費を制し、堅く節儉を守り玉はら、民をむさぼり苦しめざる程の事は、かたからめやは。昔し高野の御室と京の御室と御連枝にて渡らせつひけるか、或時、京の御室へ入御ならせ玉ひ、來し方行く末の盡きぬ御物語に、さてもかたいなかの住居は、萬

心にまかせぬ事のみ多く、殊に所傾もうすく侍るからに、あさゆふに事足らぬ勝ちにて、面白からぬ月日を送り侍りと語りもあへさせ玉はで、御目の中うるみて、打しほれさせ玉ひにたれば、京の御室の御仰せに、さればとよ、世上の人々の有様を見聞き侍るに、乏しき事も、事足らぬ思も、何れもすき好み玉ふ様に見請け侍り。是れは御仰せとも覺えぬ事を承る者かな、誰やの人か人心地有らん者の身の貧しく事足らぬを數寄好む者の侍るべきや。さればとよ、驕奢を恣にし、美麗を好むは、畢竟貧賤をすき好む者なり、三人にてすむべき従者も、五人も召伴れ、五人にてすむべき身官も、十人も召かへ、衣類につけても、調度につけても、徒歩にてすむべき假初の物語にも、輿上車よなどのめかせ玉はば、萬戸侯に封せられさせ玉ひにたりとも、事足らせ玉御覽えはおはすまじきぞ。あのれなどは、迎もすて果てたる出家遁世の身なれば、一尺をは五寸にししめ、一丈をは五尺に省略しもて行き侍れば、事足らぬなど存じもよらず。近頃は、乞食非人を憐み、老病を恵み救ふ程の事は、苦にもならず侍りと仰せられければ、高野の御室は、感じ入らせ玉ひ、漢和の才の優に渡らせ玉ふとさへ、浦山敷めをき申したるに、世間の事までも斯く賢く渡らせ玉ふ御事よと、感涙せきあへさせ玉はざりけるとぞ。寔に千載の美談ならずや。去ぬ

る寛保己己の夏にやは有る、むくつけきなき老女七八輩、予か室を叩いて、告げて云はく、我々は是れより十里ばかり北なる桂山と云へる人里もつゝかぬ山里の賤の妻をも侍り、不思議の仔細ありて、是れまでは尋ね詣でたるにて侍り、慈悲と思ほして、鹿後にも劣らぬ我らが耳に入らんず御法を、一言となりとも教化せさせ、永き開路を照らせ玉ひてよ。且つ又是れなる老女の娘にて候者、去年の冬より重病に罹りて臥ししすみ侍りにたるか、次第によわりつかれて、事切れ侍りにたるに、胸の邊の少しく暖に侍るからに、野邊の送りも暮々敷せざりけるに、斯く十日斗りも過ぎにたるに、一夜ふと蘇息し起き来て、打泣きく物語しけるは、扱ても過し頃、我は怪しき人々に引立てられて、谷際の如くなる所の暗くおそろしき處を十里ばかり行くよと覺えて、堪へかたく苦しかりしに、地獄とかや云へる恐しき世界を彼方此方へまはりたるに、四面眞暗にして、月日の光はなきて、無間燒熱の焔のどつともえ上る中に、わくと聞ゆるは、罪人共のせめなやまされて泣き叫ぶ聲なり。尊貴も高位も、乞食非人も、一處に追ひ籠められて、目も當てられぬ苦患をうくる中には、日頃見知りたる人々も多かり。出家沙門なども打交り、責めさいなまることも有りけり。又見かすむはかり廣き野原に、かきやみとか云へる者なりとて、人の形にはあれど

も、黒くもえぐいの如くなるもの、疲せからびたるが、幾等ともなく屈り居て、ひこ泣き悲む有り。斯る處をはるく行き過ぎけるに、十丈も盛み上げたる鐵の城門にたどり着きぬ。見上ぐれば二丈ばかりも有るべき大なる額を打ちたり、是は閻羅大城と云へる文字なりと教へ玉ひき。けたくましき獄卒の種々の罪人を引立て、出て入るは引きも切らず。彼の城門の中をおづくさしのうきたるに、方量もなく廣き大庭に、數もかぎりもなき罪人共の、くれ石の上にひしくと蹲り居て、泣き悲むは目も當てられずなん有りけり。彼の者どもの口々になん云へるは、娑婆にて斯く恐ろしき處ありと露しらざりし悔しとよ。法談などに説き教ゆるをば、えしれぬ尼法師原か物もらはんとて、筋なき事のみ云ひ散らすとぞ、陵り輕しめたりし勿体なとよ。何れの日何れの月にか、斯る處を遁れ出づる事のあるべき、淺猿の今の有様やと泣き悲む聲は、肝に答へて恐ろしかりき。其外叫喚、大叫喚、燒熱、大燒熱、黒繩、衆合とかや聞えし處々の地獄の有様は、心も言葉も及ぶべき事かは。また古き木森の蔭のほの暗く物すき處に、古き牢獄の朽ち腐り、破れ傾きたる中に、侍がましき者七八輩疲せ衰へたるか、袴肩綱も破れ果てたるを引きかけ、苦しげに屈り居て、人影を見付ては物乞ふ風情にて、をがらの如くなる手さし出して、ぶるく

どふるへわななく有り、是れは八十年前の伊豆の去る役所の人々なるよし。其邊を見廻せば、木蔭に立ち並びたる牢獄は、古きも有り、新きも有り、數も限りも無き中に、貴くをさくしき人の見馴れぬ裝束し玉へるか、苦しげに首うちかたげて、坐しねむり玉ふも有り、また虎鬚はへわかれて、おそろしきかほくせしてかままり居たる有り、唐土日本において、國王にもせよ、大臣にもせよ、情も無く、非道に民を食り苦しめ玉へる人々なるよし。其外處々の獄處の有様を思出ては、身の毛だちておそろしく侍りと、むせかへりく物語しけるを聞侍りては、夜とてやすく寝られ侍らぬ。助かるべき道しめらば、教化せよせ玉へや。彼の娘にて侍る者も、飛立つばかり詣でたき心には侍れど、長病の身、中々一足も叶ひ侍らず、我々はかり右の物語を聞きもあへず、恐ろしさに思ひ立ちて、さまざま來りたるにて侍りて、名號なき乞ひ求めければ、書いてあたへ侍りき。今時往々に斯る物語を聞きては、虚説なりとし、妄談なりとして、三を拍して大笑して云はく、人は二氣の真能にして、死すれば燈などの消えうするか如くなる物を、何の天堂かあり、何の地獄かあらじと。是はこれ斷見外道の所見にして、恐るべきの惡見なり。昏愚是れより甚たしきはなし。小智は菩提のさまたげとは、是れ等の輩を云へり。若し夫れ果して地獄なく天

堂なくんば、普天の下王土にあらずと云ふ事なし。何の佛塲神區をか留めん。率土の濱、王臣あらずと云ふ事なし。何の沙門僧尼をか容るさん。然るに天竺に祇園精舎あり、竹林精舎あり、逝多林那陀蘭寺あり、漢土に於て五山あり、十刹あり、吾日域は云ふに及ばず、多少の法窟靈場あり。若し夫れ天堂なく地獄なくんば、果して是れ何の用や。佛像經卷何の閑家具や。且つ又古來萬乘の尊貴、袞龍の珍御を脱し玉ひて、圓顯方袍の形をやつさせ玉ふる、其限り有るべからず。遠くは妙莊嚴王淨藏淨眼悉多太子、近くは華山の聖天子、其餘の歴代の至尊十善の帝位すべらせ玉ひては、剃髮染衣の御姿にならせ玉ひ、法王と稱せられさせ玉ふ事は何や。雲鬘霧鬘の人々には、具如大德、千代野、中條姫、祇王、祇女、佛御前、惠春比丘尼。文臣武夫には、萬里小路中納言藤房卿、最明寺入道時頼、刈萱入道重氏、佐藤兵衛憲清、熊谷庄司次郎直實、遠藤武者盛遠、岡部六彌太忠澄、其餘の英雄豪傑の人々及び古今の智者、高僧をさへに辭しかたき爵祿を辭し、棄てかたき恩愛をかり棄てよ、あらぬさまなる艱辛を経させ玉ふ事は何や。將た狂すと云はんか、將た顛すと云はんか。將た又未だ天堂地獄なき事を知り玉はずとせんか。佛法中には因果を信じ、來生ある事を知り、苦報を恐るゝを以て大智慧とす。夫れ人を萬物の靈と稱して、馬牛犬

豕、豺狼麋鹿に異なるは、所以來生有る事を知り、苦報を恐るゝを以てなり。你等か所見に任せは、一切の人をして馬牛犬豕、豺狼二麋鹿に齊しくして、而して後にあき足る者ならんか。縱令閣下世を治め國を守り玉ふ事、百年にもせよ、五十年にもせよ、隨分恐れ懼ませ玉ひ、華奢を禁じ、浮費を制して、餘計あらは、民をあはれみ惠み玉ふ事、第一の徳行なるぞと覺悟是れあるべし。古來の聖經賢典を披覽するに、盡くみな王道を以て第一と説きおかせ玉ふ。王道を論せざるは、聖經賢典にあらず。王道は何を以てか主意とし玉ふやとならば、第一に仁澤を施し、萬民を憐み救ひ、國家を治むるより外他事なし。今の世に當りて、仁澤を施し萬民を憐み救ひ玉はんとならば、嬌奢を禁じて、費を制し、近頃申し惡き事ながら、椒房の人を減少し、萬事を省察し玉ふより外、別的手段あるべからず。椒房の人々も、當分は物さびしく有る甲斐もなく、心細き事に思ほすべけれども、君のため、國家のため、萬民のため、且つは後の世の爲めにやならば、智慧有らん人々は、なご得心し玉はざる事の有るべき。椒房は人數多き程、悖嫉妬害に片時も心の穩かなる事なく、罪深き事のみにて、後の世のためあしき事こそ多けれ。主君もまた心あるべき事なり。かれもまた人の子なる者を、榮耀に誇り、自由をはたらき、班女か閨の恨を懷かせ、藤つぼの

夜半の涙をそゝかせ、果は地獄の衆生とす。少しも仁心有らん人の有るべき事かは。貞女兩夫に見えずとは、あまり片おちなるしおきならずや。願はくは賢夫兩婦を養はずともせましく欲しき事よ。昔し大相國入道清盛に祇王祇女姉妹二人つかへし内は、事靜にむつまじかりき。佛の前獨りさしくはゝりたれば、朝夕に口をしき事のみ多くて、あるにもあられず、城中を忍び出て、二人とも尼になりけるとぞ。兎角椒房は、人すくなに靜なる程、好き事はこれ有るべからず。智慧あらん人々は、こなたより請ひ願ひ玉ひてなりとも、人をへらし、事すくなにしづかに暮し玉ひて、暇あらは後の世の事など、穩密に營み玉ひたらんは、如何ばかり目出度かるべき。往々に三百五百の金銀を指出し、上國より舞子白人とかや云へるたはれ女を買取よび下し、二三年も玩びては、又は取かへ引かへ、扇子か煙管など取かゆる様に、心易く覺え玉ふ諸侯も是れ有るよし。去る程に、一家中、一年諸色の入目三分二は、椒房の入用につひゆる御家も是れ有る由。去りなから、天晴大福徳備はらせ玉ひ金銀に持ち溢れさせ玉ひてならば、兎も角もなれども、さはなく多くは千石の所領にして、二千兩の借義を負ひ、萬石の所領にして、二萬兩の借義を負ひ重ねて、こゝはの大事有らん時に、箭面に立塞がり、粉骨碎身、主君の一命にも代るべき普代相傳の家臣は、目も

見やらず、困究させしめ、苦しましめ、まさかの時に當りて、合羽箱一つかつぐ事さへ叶はぬ人々に、金銀を費し、畢竟悲むべく憐むべきは、願内の萬民ならずや。一身の榮耀を極むとて、多少の人々を痛め苦しめ玉ふは、如何なる心ぞや。後の世は如何かならせ玉ふべきぞ、寔に恐るべし。扱て又列國の諸侯、參觀交代の行列を見奉るに、先きをなへ、あどろなへ、長柄何筋、鎗何筋、武具、馬具、旗竿、幕串夥しき人數にて通行せさせ玉ふ。去る程に、かりそめの川づかへにも、家からに依りて、千兩二千兩の費は問々これ有る由。是れは定めて天正文祿時代の天下未だ靜ならざる時節、こゝはの大事の用心の格式なるべし。大樹神君、世を治め玉ひて、諸侯の往來にさび箭一筋射かけたる者こそなけれ。仁者は敵なしと申せば、隨分仁澤を施し、生民を憐み、國家を治め玉ひ、眞箇用心のためならは、普代相傳の善き人々を、前後に十騎召しつれ玉は、輕薄追從のかきあつめたる雜人原千萬人召しつれ玉ひたるより、利方は遙に強かるべし。去りなから、大福力おはして、生民をいため苦しめ玉はずは、何萬騎召しつれさせ玉ふも、御心まかせなれども、何國の沙汰を聞きても、物の哀れは萬民にとどまればなり。若し又他日參禪見性の望み是れあるにないては、第一に死の字を參究し玉ふへし。死の字は如何參究すべきぞとならば、死し了り燒



き了る時、主人公何れの處にか去ると、動中を嫌はず、靜中をとらず、行住坐臥の上において間もなく疑はせ玉はば、一夜二夜乃至五日三日の中には、必定決定大歡喜を得玉ふべし。要法も多く、指南も多かる中に、死の字は何とやら底氣味あしく思はしき事に思ほすべけれども、死字乍ら透過是れあるに於ては、いつしか生死の境を打越え、立處に金剛堅固、不老不死の大神仙とならせ玉ふ秘訣の指南にて侍れば、簡程目出度法要は是れあるべからず。死の字は、第一武士の決定すべき主要なり、死の字を參究せざらむ武士は、身心ともに怯弱にして、主心終に定まる事あたはず、こゝはの大事の場所になりては、思ひの外に、臆病未練にして、主人の專途に立つ事能はず。是の故に云ふ、驚怖みだりに起るは、主心定まらざる故なりと。縦ひ平生武術を精練して、太刀は九郎、鎧は眞田ほをつかひ得たりとも、主心定まらざる人は、まさかの時に望みて、おくれふるへて、一向用に立つ事能はず。然らば則ち萬能にすぐれたるは、主心なるべし。若しそれ主心を定めんとするは、專一に死の字を決定し玉ふべし。死字纔に決定するときは、主心定まり立つ事、磐石なををゆり居ゑたるが如しと。謂つべし。厚重山の如く、寛大海の如しと。死の字纔に決定したらん人は、見性得悟の一大事は、掌上を見るか如けん。唯返へすくも主心をゆり居

(國清練若) 國清は寺の號練若は又師若といふ、此には空寂といふ。

ゑ、朴實に身を治めさせ玉ひ、惟今迄の百萬石の若殿様をば、玉簾金屏の中、錦帳繡幕の奥、雲井のあなたに休ませませし置き、大切なるべくは、高かみにおかず、危き處を嫌ふ如く、自身は今日より引き下げ、仁政孝慈の使はれ者になりて、山海遙かに隔りたる奥官奴僕のおさましき下郎におちふれたると覺悟せさせ玉ひ、しかと主心を居ゑ定めて、かりそめにも大身主君の良曲をせず、朝夕の膳部も、一菜に過ぎず、夏冬の衣類も、多くは綿布にして、人目を忍びては、庭の掃地や、てうづの水、或る時は、奥に乗じたる良にて、たのおだ人の御馬のすそ、見馴れぬ下郎の業までも、仕習ひ手馴れ、内證は、大樹神君の聖慮を主意とし、仁澤を生民に施させ玉はと、天是れに賜ふに長壽を以てし、地是れにささぐるに多福を以てして、彼の仁者は壽しと云へる本文に少しも違はず、浦嶋か長壽を保たせ玉ひ、萬世の後までも、明德至善の名大將なりしにとあをかれさせ玉へかしの寸志斗が。君子も千言すれば一失あり、小人も千言すれば一徳ありと申す古き言も侍れば、小人の千言若しや半徳なりとも書き當てたらましかは、御政務の寸助にもなる事もやと書き續けたるにて、利用を世波の底につるにあらす。豈に聲名を塵苑の畦にさしはさむ者ならんや。一年、國清練若にあらして見参しまゐらせしより、折ふし愚老か瞻仰せ出され候由、遙に承

り及び感入り、高慮に契ふべき事とは存せずなから、心の及ぶだけ書き載せたるにて侍り。左もおはさすは、七旬に及び老いさらぼひて、本の露、末のしづくにも劣りて、朝夕を計らされは、世間の望みは一向におもひ絶えたる者を、何の追従輕薄にか、終夜老眼を摩挲し、孤燈を挑けて、斯くまては書綴り侍るべきや。あしかれと祈らぬ小山田のいたつらならぬ僧都なりけり、いなや。且つ又馬は善言を聞きては拜すと申す事の侍り、そのおみ大禹と申し奉るは、生知安行の大聖人にておはしけれども、樵漁奴隸の輩の語といへども、善言を聞かせ玉ひては、拜し玉ひ、唯きく事のおそきを愁ひさせ玉ひける由。閣下も又林下野人の語といへども、政務を助る處あらは、彼の義經か秘藏の虎の巻物に少しも劣らぬ、田舎三零の兵書なるぞと思はして、練り返し高覽可給候。若し又一向筋なき事に侍らば、草卒彼の竈下に尋常相勤め罷在り候丙丁童子に可被仰付候。穴賢。

惟時。寶曆第四甲戌歲

### 邊鄙以知語終

〔丙丁童子云々〕丙丁童子は火なり。此にては即ち火中に投ずるをいふ。

### 序

寶曆丁丑の春、長安の書肆松月堂何某とかや聞えし、遠く草書を誦して、吾か鵲林近侍の左右に寄せて云はく、伏して承る、老師の古紙堆中、夜船閑話とかや云へる草稿あり。書中多く氣を鍊り精を養ひ、人の營衛をして充たしめ、専ら長生久視の秘訣を聚む。謂はゆる神仙鍊丹の至要なりと。是の故に世の好事の君子是れを思ふ事、荒旱の雲霓の如し。偶々雲水の徒侶竊に傳寫し來るあるも、秘重し珍藏して入をして見せしめず、天瓢ひなしく櫃にをさめて匿したるか如し。願はくは是れを梓に壽かふして、以て其の渴を慰せん。聞く老師常に人を利するを以て老後を樂しみ玉ふと。若し夫れ人に利あらば、師豈に是れを吝しみ玉はんやと。二虎含み來て師に呈す。師微々として笑ふ。此において諸子、舊書櫃を開けば、草稿蠶魚の腹中に葬らるゝ者中葉に過たり。諸子即ち訂正傳寫して、既に五十來紙を見る。即ち封裏して以て京師に寄せんとす。予が馬齒一日も諸子に長たるを以て、其の端由を書せん事を責む。予も亦辭せずして書す云はく、師鵲林に住する事大凡四十年、鉢盂を掛けしより以來、雲水參玄の布衲子纒に門閫に跨れば、師の毒涎を甘ない、痛棒を滋しとして、辭し去ることを忘るゝ者、或は十年、或は二十年、鵲林々下の塵と成る事も

亦總に顧みざる底あり。盡く是れ叢林の頭角、四方の精英なり。各々西東五六里が間に分れて、舊舎廢宅、老院破廟、借て以て菴居の處として清苦す。朝艱暮辛、晝夜夜凍、口に投する者は菜葉麥麩、耳に觸るゝ者は熱喝垢罵、骨に徹する者は噴舉痛棒、見る者額を撥め、聞者肌汗す、鬼神もまた涙を浮へつべく、魔外もまた掌を合せつべし。其の初め來る時は、采玉、河晏か美貌有りて、肌膚光澤凝れる膏の如くなる者も、久しからずして恰も杜甫、賈島か形容枯槁顔色憔悴するが如く、或は屈子に澤畔に逢ふが如し。參玄軀命を顧みざる底の勇猛の上士にあらざるよりんば、何の樂有つてか片時も溱泊する事を得んや。是の故に往々に參窮度に過ぎ、清苦節を失する族は、肺金いたみかじけ、水分枯渴して、疝癰塊痛、難治の重症を發せんとす。是れを憐み是れを愁ひて、師不豫の色有る者連日、乍ら忍俊不禁にして、雲頭を按下し、老婆の鼻乳を絞つて、是に授るに内觀の秘訣を以てす。乃ち云はく、若し是れ參禪辨道の上士心火逆上し、身心勞疲し、五内調和せざる事あらんに、鍼灸藥の三つを以て是れを治せんと欲せば、縦ひ華陀扁倉と云へども、輒く救ひ得る事能はじ。我に仙人還丹の秘訣あり。爾か證試に是れを修せよ、奇功を見る事、雲霧を披いて皎日を見るが如けん。此の秘要を修せんと欲せば、且らく工夫を抛下し、話頭を

拈放して、先づ須らく熟睡一覺すべし。其の未だ睡りにつかず眼を合せざる以前に向て、長く兩脚を展へ、強く踏みそろへ、一身の元氣をして臍輪氣海丹田腰脚足心の間に充たしめ、時々此の觀を成すべし。我此の氣海丹田腰脚足心、總に是れ我が本來の面目、面目なれの鼻孔がある。我此の氣海丹田、總に是れ我が本分の家郷。家郷の何の消息がある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が唯心の淨土。淨土何の莊嚴がある。我が此の氣海丹田、總に是れ我が己身の彌陀。彌陀何の法をか説くと打返へしく、常に斯くの如く妄想すべし。妄想の功果つらば、一身の元氣いつしか腰脚足心の間に充足して、臍下軀然たる事、いまた襍打ちせざる鞠の如けん。恁麼に單々に妄想し將ち去て、五日七日乃至三七日を経たらむに、従前の五積六聚氣虛勞役等の諸症、底を拂て平癒せずんば、老僧が頭を切り將ち去れ。此において諸子歡喜作禮して、密々に精修す。各々悉く不思議の奇功を見る。功の遲速は進修の精進に依るといへども、大半皆全快す。各々内觀の奇功を讚嘆して休まず。師の曰く。爾が輩心病全快を得て以て足れりとする事勿れ。轉た治せば轉た參せよ。轉た悟らば轉た進め。老僧初め參學の時、難治の重病を發して、其の憂苦、諸子に十倍せり。進退惟谷まる。尋常心にひそかに思惟すらく、生きて此の憂愁に沈まんよりは、如か

と早く死して此輩を捨てんにはど。何の幸そや、此の内観の秘訣をつたへて、全快を得る事今の諸子の如し。至人の云はく、此は是れ神仙長生不死の神術なり。中下は世壽三百歳なるべし。其の餘は計り定むべからず。予則ち歡喜に堪えず、精修怠らざる者大凡三年。心身次第に健康に、氣力次第に勇壯なる事を覺ふ。此に於て重ねて心に竊に謂へらく、縦ひ此の眞修を修し得て、彭祖が八百の歳時を保ち得るも、唯是れ一箇頑空無智の守屍鬼ならくのみ。老狸の舊窠に睡るか如し。終に壞滅に歸せん。何が故ぞ、今既に獨りも葛洪、餓拐、張華、費張が輩を見す。如かじ四弘の大誓を憤起し、菩薩の威儀を學び、常に大法施を行し、虚空に先つて死せず、虚空に後れて生ぜざる底の不退堅固の眞法身を打殺し、金剛不壞の大仙身を成就せんにはど。此に於て眞正參玄の上士兩三輩を得て、内観と參禪と共に合はせ并らべ時へて、且つ耕し且つ戰ふ者、蓋し茲に三十年、年々一員を添へ、二肩を増し得て、今既に二百衆に近し。其の中間方來の衲子勞屈疲倦の族、或は心火逆上し、正に發狂せんとする底を憐み、密に此の内観の至要を傳授し、立所に快癒せしめ、轉た悟れば轉た進ましむ。馬年今歳古稀に越えたりと云へども、半點の病患なく、齒牙全く搖落せず。眼耳次第に分明にして、動もすれば變遷を忘る。毎月兩度の法施終に怠倦せず。請

に佗方に應じて三百五百の海衆を聚會して、或は五旬七旬を經に録に雲水の所望に隨て胡說亂道するは、大凡五六十會に及ぶと云へども、終に一日も罷講齋を鎖さず、身心健康氣力は次第に二三十歳の時には遙に勝されり。是れ皆彼の内観の奇功に依る事を覺ふ。住菴の諸子各々悲泣作禮して云はく、吾が師大慈大悲願はくは内観の大略を書せよ。書して留めて、後來禪病疲倦吾が輩の如き者を救へ。師即ち領す。立處に草稿成る。稿中何の説く處ぞ、曰く、大凡生を養ひ長壽を保つるの要、形を鍊るにしかず、形を鍊るの要、神氣をして丹田氣海の間に凝らさしむるにあり。神凝るときは氣聚る。氣聚るときは即ち眞丹成る。丹成る時は形固し。形固きときは神全し。神全きときは壽し。是れ仙人九轉還丹の秘訣に契へり。須らく知るべし、丹は果して外物に非ざる事を。千萬唯心火を降下し、氣海丹田の間に充たしむるに有るらくのみ。住菴の諸子此心要を勤めてはげみ、進んで怠らすんば禪病を治し勞疲を救ふのみにあらず。禪門向上の事に到て、年來疑團あらむ人々は、大に手を拍して大笑する底の大歡喜有らむ。何か故ぞ、月高して城影盡く。

維時寶曆丁丑孟正廿五嘗。窮乏菴主飢凍炷香稽首題。

## 夜船閑話

白隱禪師

山野初め參學の日、誓つて勇猛の信心を憤發し、不退の道情を起激し、精鍊刻苦する者、既に兩三霜、乍ち一夜忽然として落節す、従前多少の疑惑、根に和して氷融し、曠劫生死の業根、底に徹して瀧滅す。自ら謂へらく、道人を去る事寔に遠からず、古人三十二年是れ何の捏怪ぞと、怡悅蹈舞を忘るゝ者數月、向後日用を廻顧するに、動靜の二境全く調和せず、去就の兩邊、總に脱洒ならず。自ら謂へらく猛く精彩を着け、重て一回捨命し去らんと。こゝにおいて牙關を咬定し、雙眼睛を瞪開し、寢食ともに廢せんとす。既にして未だ期月に亘らざるに、心火逆上し、肺金焦枯して、雙脚氷雪の底に浸すが如く、兩耳溪聲の間を行くが如し。肝膽常に怯弱にして、舉措恐怖多く、心神困倦し、寐寤種々の境界を見る。兩腋常に汗を生じ、兩眼常に涙を帶ふ。此において遍く明師に投し、廣く名醫を探ると云へども、百藥寸功なし。或人曰く、城の白河の山裏に巖居せる者あり、世人是れを名けて白幽先生と云ふ。靈壽三四甲子を閱みし、人居三四里程を隔つ。人を見る事を好ま

す、行くときは必ず走て避く。人其の賢愚を辨する事なし。里人専ら稱して仙人とす。聞  
く故の丈山氏の師範にして、精しく天文に通じ、深く醫道に達す、人あり禮を盡くして咨  
叩するときは、稀れに微言を吐く。退て是れを考ふるに大に人に利ありと。此において資  
永第七庚寅孟正中洗、竊に行纏を着け濃東を發し黒谷を越え、直ちに白川の邑に到り、包  
を茶店におろして、幽か巖栖の處を尋ぬ、里人遙に一枝の溪水を指す。即ち彼の水聲に隨  
て遙に山溪に入る。正に行く事里ばかりに、乍ら流水を踏斷す。樵徑もまたなし、時に一  
老夫あり、遙に雲煙の間を指す。黃白にして方寸餘なる者あり。山氣に隨て或は顯はれ或  
は隠る、是れ幽か洞口に垂下する所の蘆簾なりと。予即ち裳を褰けて上る。巖巖を踏み蒙  
茸を披けば、冰雪草鞋を咬み、雲露褙衣を厭す、辛汗を滴し、苦膏を流して、漸く彼の蘆  
簾の處に到れば、風致清絶、實に物表に丁々たる事を覺ふ。心魂震ひ恐れ、肌膚戰栗す。  
且らく巖根に倚て數息する者數百、少焉あつて衣を振ひ襟を正して、畏つゝ鞠躬して簾  
子の中を望めば、朦朧として幽か目を收めて端坐するを見る。蒼髮垂れて膝に到り、朱顏  
麗ふして棗の如し。大布の袍を掛け軟草の席に坐せり、窟中纔に方五六笏にして全く資生  
の具無し。机上只中府と老子と金剛般若とを置く。予即ち禮を盡くして苦るに病因を告げ

且つ救ひを請ふ。少焉幽眼を開いて熟々視て、徐々として告げて曰く、我は是れ山中半死  
の陳人、糞粟を拾ふて食ひ、糜鹿に伴つて睡る。此の外更に何をか知らんや。自ら愧づ遠  
く上人の來望を勞する事を。予即ち轉た咨叩して休まず。時に幽恬如として予が手を投ら  
へて、精しく五内を窺ひ九候を察す。爪甲長さこと半寸、慘乎として頰を拵めてつけて云  
はく、己哉、觀理度に過ぎ、進修節を失して、終に此の重症を發す、寔に醫治し難き者は  
公の禪病なり。若し鍼灸藥の三つの物を恃んで、而して後に是れを救はんと欲せば、扁倉  
力をつくし華陀頰を拵むるも、奇功を見る事能はじ。只今既に觀理の爲めに破らる。勤め  
て内觀の功を積まずんば、終に起つ事能はじ。是れ彼の起倒は必ず地に依るの謂なり。予  
曰く、願はくは内觀の要秘を聞かん。學ひがてらに是れを修せん。幽肅々如として容をわ  
らため、從容として告げて曰く、嗚呼、公の如きは問ふ事を好むの士なり。我か昔し聞け  
る處を以て微しく公に告んか。是れ養生の秘訣にして、人の知る事稀れなり。忘らすんば  
必ず奇功を見ん、久視も又期しつべし。夫れ大道分れて兩儀あり、陰陽交和して人物生  
類、先天の元氣中間に默運して、五臟列り經脈行はる、衛氣營血、互に昇降循環する者、  
晝夜に大凡五十度、肺金は乾瀝にして膈上に浮び、肝木は牡藏にして膈下に沈む。心火

は大陽にして上部に位し、腎水は大陰にして下部を占む。五臓に七神あり、脾胃各々二神を藏くす。呼は心肺より出で、吸は腎肝に入る、一呼に脈の行く事三寸、一吸に脈の行く事三寸、晝夜に一萬三千五百の氣息あり。脈一身を巡行する事五十次、火は輕浮にして、つねに騰昇を好み、水は沈重にして常に下流を務む。若し人察せず觀照成は節を失し、志念或は度に過くるときは、心火熾衝して肺金焦薄す。金母苦しむときは、水子衰滅す。母子互に疲傷して、各々五位困倦し、六屬凌奪す。四大増損して、各々百一の病を生ず。百藥功を立する事能はず、衆醫總に手を束ねて、終に告る處なきに到る。蓋し生を養ふ事は國を守るか如し、明君聖主は、常に心を下に専にし、暗君庸主は常に心を上に恣にす。上に恣にするときは、九卿權に誇り、百僚寵を恃んで、曾て民間の窮困を顧る事無し。野に菜色多く、國餓卒多し。賢良潛み竄れ、臣民嗔り恨む。諸侯離れ叛き、衆夷競ひ起つて、終に民庶を塗炭にし、國脈永く斷絶するに到る。心を下に専らにするときは、九卿儉を守り、百僚約を勤めて、常に民間の勞疲を忘るゝ事なし。農に餘まんの粟あり、婦に餘まんの布有りて、群賢來り屬し、諸侯恐れ服して、民肥え國強く、令に違するの悉民なく、境を侵すの敵國なし。國刁斗てんとの聲を聞く事なく、民戈戟の名を知らず。人身もまた然り。至

十

人は常に心氣をして下に充たしむ。心氣下に充つるときは、七凶内に動く事なく、四邪また外より窺ふ事能はず。營衛充ち心神健かなり、口終に藥餌の甘酸を知らず、身終に鍼灸の痛痒を受けず。膚流はつねに心氣をして上に恣にす。上に恣にするときは、三寸の火、右寸の金を尅して、五官縮り疲れ、六親苦しみ恨む。是の故に漆園曰く、真人の息は、是れを息するに踵を以てし、衆人の息は、是れを息するに喉を以てす。許俊が曰く、蓋し氣下焦に在るときは、其の息遠く、氣上焦に有るときは、其の息促まる。上陽子が曰く、人に真一の氣有り、丹田の中に降下するときは、一隔また復す。若し人始初復の候を知らむと欲せば、暖氣を以て是れが信とすへし。大凡生を養ふの道、上部は常に清涼ならん事を要し、下部は常に温暖ならん事を要せよ。夫れ經脈の十二は、支の十二に配し、月の十二に應じ、時の十二に合す。六爻變化再周して、一歳を全ふするが如し。五陰上に居し、一陽下を占む。是れを地雷復と云ふ。冬至の候なり。真人の息は、是れを息するに踵を以てするの謂か。三陽下に位し、三陰上に居す、是れを地天泰と云ふ。孟正の候なり。萬物發生の氣を含んで、百卉春化の澤を受く。至人元氣をして下に充たしむるの象、人は是れを得るときは、營衛充實し、氣力勇壯なり。五陰下に居し、一陽上に止まる。是れを山地剝

といふ。九月の候なり。天是れを得るときは、林苑色を失し、百卉荒落す。是れ衆人の息する喉を以てするの象。人は是れを得るときは、形容枯槁し、齒牙搖落す。所以に延壽書に云はく、六陽共に盡く、則ち是れ全陰の人死し易し。須らく知るへし、元氣をして常に下に充しむ。是れ生を養ふ樞要なる事を。昔し吳契、初石堊先生に見ゆ、齊戒して鍊丹の術を問ふ。先生の曰く、我に元々眞丹の神秘あり。上々の器にあらざるよりんば、得て傳ふべからず。右へ黄成子是れを以て黄帝に傳ふ。帝三七齋戒して是れを受く。夫れ大道の外に眞丹なく、眞丹の外に大道なし。蓋し五無漏の法あり、備の六欲を去り、五官各々其の職を忘るゝときは、混然たる本源の眞氣、彷彿として目前に充つ。是れ彼の大白道人の謂はゆる我か天を以て事ふる所の天に合せる者なり。孟軻氏の謂はゆる浩然の氣、是れをひきひて臍輪氣海丹の田間に藏めて、歲月を重ねて是れを守て守一にし去り、是れを養ふて無適にし去て、一朝乍ち丹竈を掀翻するときは、内外中間八紘四維、總に是れ一枚の大還丹。此の時に當て初めて自己即ち是れ天地に先つて生せず、虚空に後れて死せざる底の眞箇長生久視の大神仙なる事を覺得せん。是れを眞正丹竈功成る底の時節とす。豈に風に御し霞に跨り、地を締め水を踏む等の鎖末たる幻事を以て懐とする者ならんや。大洋を攪い

て酥酪とし、厚土を變じて黄金とす。前賢曰く、丹は丹田なり、液は肺液なり。肺液を以て丹田に還へす。是の故に金液還丹といふ。予が曰く、謹んで命を聞いつ、且らく禪觀を抛下し、努め力めて治するを以て期とせん。恐るゝ處は、李士才が謂はゆる清降に偏なる者にあらずや。心を一處に制せば、氣血或は滯碍する事なからむか。幽微々として笑つて云はく、然らず、李氏いはずや、火の性は炎上なり。宜しく是れを下らしむべし。水の性は下れるに就く、宜しくこれをして上らしむべし。水上火下る。是れを名けて交と云ふ。交るときは既濟とす。交らざるときは未濟とす。交は生の象、不交は死の象なり。李家が謂はゆる清降に偏なりとは、丹溪を學ぶ者の弊を救はんとなり。古人云はく、相火上り易きは、身中の苦しむ所、水を補ふは火を制する所以なり。蓋し火に君相の二義あり、君火は上に居して、靜を主り、相火は下に處して、動をつかさどる。君火は是れ一心の主なり、相火は寄輔たり。蓋し相火に兩般あり。謂はゆる腎と肝となり。肝は雷に比し、腎は龍に比す。是の故に云ふ、龍をして海底に歸せしめば、必ず迅發の雷なけん。但し雷をして澤中に藏れしめば、必ず飛騰の龍なけん。海が深か、水にあらすといふ事なし。是れ相火上り易きを制するの語にあらずや。又曰く、心勞煩するときは、虚して心熱す。心虚す



るときは、是れを補するに心を下して以て腎に交也。是れを補と云ふ。既濟の道なり。公先きに心火逆上して、此の重病を發す、若し心を降下せずんば、縦ひ三界の秘密を行し盡したりとも、起つ事得じ。且つ又我が形模、道家者流に類するを以て、大に釋に異なる者とするか、是れ禪なり。他日打發せば、大に笑ひつべきの事有らむ。夫れ觀は無觀を以て正觀とす、多觀の者は邪觀とす。向に公多觀を以て此の重症を見る。今是れを救ふに無觀を以てす。また可ならずや。公若し心炎意火を收めて、丹田及び足心の間におかば、胸膈自然に清涼にして、一點の計較思想なく、一滴の識浪情波なけん。是れ真觀清淨觀なり。云ふ事なかれ、しばらく禪觀を放下せんと。佛の言はく、心を足心にをさめて、能く百一の病を治すと。阿含に、酥を用ゆるの法あり。心の勞疲を救ふ事尤も妙なり。天台の摩訶止觀に、病因を論ずる事甚だ盡くせり。治法を説く事も亦甚だ精密なり。十二種の息あり、よく衆病を治す。臍輪を縁して豆子を見るの法あり。其の大意心火を降下して、丹田及び足心に收むるを以て至要とす。但た病を治するのみにあらず、大に禪觀を助く。蓋し繫緣諦眞の二止あり。諦眞は實相の圓觀、繫緣は心氣を臍輪氣海丹田の間に收め守るを以て第一とす。行者是れを用ゆるに大に利あり。古へ永平の開祖師、大宋に入て如淨を天童に拜す

師、一日、密室に入て益を請ふ。淨曰く、元子、坐禪の時、心を左の掌の上におくべしと。是れ即ち顛師の謂はゆる繫緣止の大略なり。顛師初め此の繫緣内觀の秘訣を教へて、其の家兄鎮愼が重病を、萬死の中に助け救ひたまふ事は、精しくは小止觀の中に説けり。また白雲和尚曰く、我つねに心をして腔子の中に充たしむ。徒を匡し衆を領し、寶を接し機に應じ、及び小參普説七縱八横の間において、是れを用ひてつくる事なし。老來殊に利益多き事を覺ふと。寔に貴ふべし。是れ蓋し素問にみゆる恬澹虚無なれば、真氣是れにしたかふ。精神内に守らば、病何れより來らむといふ語に本つき玉ふ者ならむか。且つ夫れ内に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、一毫髪ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す。これ生を養ふ至要なる事を知るべし。彭祖が曰く、和神導氣の法、當さに深く密室を鎖ざし、牀を安じ席を煖め、枕の高さ二寸半、正身偃臥し、瞑目して心氣を胸膈の間に閉し、鴻毛を以て鼻上につけて、動かざる事三百息を経て、耳聞く處なく、目見る處なく、斯の如くなるときは、寒暑も侵かす事能はず、蜂蠶も毒する事能はず。壽三百六十歳、是れ真人に近しと。又蘇内翰が曰く、己に飢て方に食し、未だ飽がすして先つ止む。散步逍遙して、務めて腹をして空からしめ、腹の空なる

時に當て、即ち靜室に入り、端坐默然して出入の息を數へよ。一息よりかぞへて十に到り、十より數へて百に至り、百より數へ放ち去て千に至りて、此の身兀然として、此の心寂然たる事虚空と等し。斯のごとくなる事久ふして、一息おのづから止むる。出でず入らざる時、此の息八萬四千の毛竅の中より雲蒸し霧起るが如く、無始劫來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅する事を明悟せん。譬へば盲人の忽然として眼を開くが如けん。此の時人に尋ねて路頭を指す事を用ひず。只要す尋常言語を省略して、偏の元氣を長養せん事を。是の故に云ふ、目力を養ふ者は常に眩し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に黙す。予が曰く、酥を用ゆるの法、得て聞ひつへしや。幽か曰く、行者定中四大調和せず身心共に勞疲する事を覺せば、心を起して應に此の想を成すべし。譬へば色香清淨の軟蘇鴨卵の大きさの如くなる者、頂上に頓在せんに、其の氣味微妙にして、遍く頭顱の間、うるはし、浸々として潤下し來て、兩肩及び雙臂、兩乳胸膈の間、肺肝腸胃、脊梁髀骨次第に沾注し將ち去る。此の時に當て胸中の五積六聚、疝癖愧痛、心に隨て降下すること、水の下につくかごとく、歷々として聲あり。遍身を周流し、雙脚を温潤し、足心に至て即ち止む。行者再び應に此の觀を成すべし。彼の浸々として潤下する所の餘流積もり湛

えて、暖め蘇す事恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是れを煎湯して浴盤の中に盛り湛えて、我か臍輪已下を漬け蘇すがごとし。此の觀をなすとき、唯心所現の如くに、鼻根乍ち希有の香氣を聞き、身根俄に妙好の軟觸を受く。身心調適なる事、二三十歳の時には遙に勝れり。此の時に當て積聚を消融し、腸胃を調和し、覺えず肌膚光澤を生ず。若しそれ勤めて怠らずんば、何れの病か治せざらむ、何れの徳かつまざらん、何れの仙か成せざる、何れの道か成せざる。其の功驗の遲速は、行人の進修の精麤に依るらくのみ。走始め卅歳の時、多病にして公の患に十倍しき、衆醫總に顧みざるに到る。百端を窮むといへども、救ふべきの術なし。此において上下の神祇に祈て天仙の冥助を請ひ願ふ。何の幸ぞや計らすも此の軟酥の妙術を傳受する事を。歡喜に堪えず、綿々として精修す。未だ期月ならざるに、衆病大半銷除す。爾來身心輕安なる事を覺ゆるのみ。癡々兀々、月の大小を記せず、年の閏餘を知らず、世念次第に輕微にして、人欲の舊習もいつしか忘れたるか如し。馬年今歲何十歳なる事もまた知らず。中頭端由有りて、若丹の山中に遭逢する者、大凡三十歳、世人都て知る事なし。其の中間を顧るに、恰も黃梁半熟の一夢の如し。今の此の山中無人の所に向て、此枯槁の一具骨を放て、太布の單衣纒に二三片を掛け、嚴冬の寒

威綿を折くの夜といへども、枯腸を凍損するにいたらず。山粒すでに斷えて穀氣を受けざる事、動もすれば數月に及ぶといへども、終に凍餒の覺もなき事は、皆此の觀の力ならずや。我今既に公に告ぐるに、一生用ひ盡くさる底の秘訣を以てす。此の外更に何をか云はんやと云つて、目を收めて默坐す。予も亦涙を含んで禮辭す。徐々として洞口を下れば、木末纔に殘陽を掛く、時に履聲の丁々として山谷に答ふるあり、且つ驚き且つ怪んで、畏づ／＼回顧すれば、遙に幽が巖窟を離れて自ら送り來るを見る。即ち曰く、人迹不到の山路、西東分ち難し、恐らくは歸客を惱せん。老夫しばらく飯程を導かんと云つて、大駒履を着け、瘦鳩杖をひき、峻巖を踏み峻岨を陟る事、飄々として坦途を行くが如く、談笑して先驅す。山路遙に里許を下りて、彼の溪水の所に到つて、即ち曰く、此の流水に隨ひ下らば、必ず白川の邑に到らむと云つて、慘然として別、る且らく柴立して幽か回歩を目送するに、其の老歩の勇壯なる事、飄然として世を遁れて羽化して登仙する人の如し、且つ羨み且敬す。自ら恨む、世を終るまで此等の人に隨逐する事能はざる事を。徐々として歸り來て、時々彼の内觀を潛修するに、纔に三年に充たざるに、從前の衆病、藥餌を用ひず鍼灸を假らず、任運に除遣す。特り病を治するのみにあらず、從前手脚を執ひ事

得ず、齒牙を下す事得ざる底の難信、難透、難解、難入底の一着子、根に透り底に徹して、透得過して大歡喜を得る者、大凡六七回。其餘の小悟怡悅、蹈舞を忘るゝ者數をしらす。妙喜の謂はゆる大悟十八度小悟數を知らずと。初めて知る、寔に我を欺かざる事を。古へ二三縹の襪を着くといへ共、足心常に氷雪の底に浸すが如くなる者、今既に三冬嚴寒の日と云へども、襪せず爐せず、馬齒すてに古稀を越たりといへども、指すへき半點の小病もまたなき事は、彼の神術の餘勳ならんか。云ふ事なかれ、鶴林半死の殘喘、多少無義荒唐の妄談を記取して、以て佗の上流を誑惑すと。是れつとに靈骨あつて、一槌に既に成する底の俊流の爲に設くるにあらず、癡鈍子が如く、勞病子に類する底、看讀して子細に觀察せば、必ず少しき補ならんか。只恐る別人の手を拍して大笑せん事を。何が故ぞ、馬枯筭を咬んで午枕に喧し。

## 夜船閑話 終

## 寶鏡窟記

白隱禪師

經に曰く、佛身法界に充滿して、つねに一切群生の前に示現すと。然らば即ち目の見る處總に是れ如來の清淨法身にあらすして何ぞや。しかるを都て見奉ること能はず、惠眼既に盲たる故なるべし。又曰く、我常にこゝに住して、つねに說法して無數億の衆生を教化すと。しからば即ち耳の聞く處、諸佛微妙の教體ならすして何ぞや。然るを都て聞奉る事能はず、天耳既に聾たる故ならずや。寛永の初め、豆州賀茂郡手石村の漁翁、つねに産業の拙きを恨み、深く來生の苦輪を恐れ、晝夜に念佛して怠る事なし。自ら云はく、漁獵は我が家業なり、念佛は我が私業なりと。常に船上にありても、終夜念佛して動もすれば網する事もまた忘るゝ斗りなりけり。いつの頃よりか貴き光の時々に海面に浮ふを見る、漁翁是を怪みて、船して彼の光の處に到れば、岩窟あり、廣さ二丈ばかりなるべし、遙に窟中を窺ひ望むに、昏々として淺深を計る事能はず、潮に隨ふて開閉す、滿る時は、一片の水波窟中に充つ。一日、漁翁その潮勢のおつるを待ちて、畏づゝ彼の窟中に棹もて兩岩を

さへへて進むこと數十笏、轉た進めば轉たくらし、忽然として股戰き膽震へ、心身驚き恐れて、正に正氣を失せんとす。こゝにおいて合掌跪坐して念佛すること數十聲、身心次第に平穩なることな覺ふ。少焉あつて、徐々として眼をひらけば、一遍の金光窟中に煥發して、瑞耀膽を照らし、異香掬しづべし。熟らく見れば、無量壽尊及び二大士をさへに端嚴珠特の妙相有りて、紫磨金の聖容嚴然たり、窟中廣博なること大虚の邊廓たるが如し、如來の身量何千尺と云ふことを知らず。漁翁即ち悲泣念佛して、身心ともに消え失せたるが如し、覺えず時を移すこと數刻、乍ち怒濤の岸を打つ聲を聞く、既にして潮の洞口を塞がんことを恐れて泣くく尊容に別れ奉りて、念佛しながら漕がへりぬ。扱て里人斯くなん告げたりける程に、遠近驚き起ちて、潮の落ち洞口のひらくを待ちて、行きて瞻禮する者ひきもさらず、正に窟中に入るに當りて、涕淚悲泣、感汗肌をひたし、佛念して伏しまるる者あり、打見て興さめたる貌して守り居るもあり、怪しげなる貌して、彼方此方見まはし冷笑もあり、是れ皆信心の淺深罪業の輕重に隨ふて、所見まち／＼なる故なり。彼の涕淚悲泣する底は、如來の身量或は三尺或は五尺乃至一丈乃至二丈、紫金光聚の中に嚴然として立せ玉ふを拜し奉りたる者なり、是れ上品の行者なりと知るべし。又彼の打ち仰ぎて

ひたすらに念佛する底は、金色の聖容或は五寸或は七寸さら／＼と照輝きて窟中に立せ玉ふを拜し奉る者なり、是れ中品の行者なりと知るべし。興さめたる貌して守り居けるは、金光をも拜せず、寶蓋をもさかず、混黒にくろく只た燈木なごのかくなる者、或は三寸或は五寸目鼻の分ちもなく、三つ並ひ立ち玉ふを見おりて、さしてもなき事をさやう聲らしく云ひ觸して、多の人々を欺き眩して騒かしめる事よ、憎き漁人めか仕業なるぞかしなご興さましたる者なり、是れは下品の行者なりと知るべし。又彼のうろ／＼として彼方此方見廻し冷笑けるは、無智昏愚の下郎、尋常に世を信せず、因果を知らず、少しばかり假名雙紙など讀み覺えて、荒唐のみ聞きて物知りたてする斷見外道の部類なりと知るべし。神明にも尊ばれ佛陀にも憐まれ玉ひにたりける惠心院の僧都の大信は大佛を見、小信は小佛を見ると云ひおかれけるは止事なく貴くも覺えらるれ。彼の人々の信根の淺深罪業の輕重に隨ふて、所見まち／＼なると、思ふに毫釐も差ふことなし。譬へは明鏡の臺に當つて、妍醜少しも遁れざるが如し。是の故に寶鏡窟と稱し、鏡岩と名づく。近頃俗には彌陀窟と云ふ。或人の云はく、我れ聞く、如來は三身を具足し玉ふと。且つ夫れ寶鏡窟の如來の如きは、法身と云はんか、報身とせんか、將た又稱して化身と云はんか、如來既に

群生を利濟せしが爲めに、世に出現し玉ふとならば、城邑聚落いかにも人たち多かる處に現し玉ひて、多くの人を利益し玉ふへきに、何ぞや遠境邊土人里もつかぬ處に雨をさけ風を恐れ、しばらく潮の落るを待つなる危き岩穴の中に應現し玉ふことは何ぞや。又聞く番々出世の如來、何れも開佛智見道の一事を以て本懐とし玉ふと。しかるを獨り無量壽尊のみ往生淨土の事を以て、我等を引導し玉ふことは何ぞや。予曰く、佛に三身あり、法身を以て體とす、報化の二身は用なり、今寶鏡窟の如來の如きは、法身と云はんも亦得たり、報化の二身と稱せんもまた得たり、天堂地獄、淨邦穢土、山河大地、佛界魔宮、草木叢林、有情非情、盡く是れ如來の眞法身、當所をはなれず、常に堪然たりといへども、見性の上士に非ざるよりは、輒く見ること能はず、是の故に諸佛報化の二身を現じて衆生を引導す、禪定誦經、念佛持戒、分に隨つて進修して怠らざる時は、情念止み思想盡き、一心不亂の田地に到りて、三昧發得し、圓解煥發し、乍ち如來の眞法身に契當す。此の時に當て、五眼俄に開明し、四智立處に成就す、是れ即ち開佛智見道の當體にして、見性入理の一刹那なり。思想盡き、情念休する時節を往と云ひ、一心不亂の田地に到るを生と云ふ。如上の眞理現前して、唯一乘の大事、目前に分明なるを來と云ふ。此の時に當つて、行者

心境不二、理智合冥するを迎と云ふ。然らば即ち來迎往生、開佛智見、畢竟同一模範なる者にあらずや。須らく知るべし、三身不二、不二三身、三世古今の間に見性せざるの佛祖なく、見性せざるの賢聖なきことを。禪定誦經、念佛持戒、皆是れ見性の助因なるべし、彼の黃卷赤軸を執らへて佛經なりと偏執し、泥丸塑像を執らへて佛像なりと心得む人々は、夢にも曾て見ること能はず、是れ佛身の應現豈に又城邑聚落をしも云はんや。彼の觀世大士の如きは、蛤蜊の胎中に身を現し瓢瓠の肚裏に跡を垂れ、遠境邊土金沙灘と云へる處の馬郎が小婦と身を現し玉ひ、又海島邊鄙人多く住みける所に、念佛の魚といへるありき、漁者共多く濱邊に打ち寄り、高聲念佛時を移し、皆々一心不亂に到りける時、魚ども多く海面に浮ぶ、此の時網を下せば、夥しく魚を得、念佛の多少、聲の高下に隨ふて魚を得ることもまた多少あり。是の故に此の處の民念佛ぬ以て家業の如くす。傳へて云ふ、此の魚、彌陀の化現にして、無佛世界の衆生を濟度し玉はん爲めに、斯の如きの善巧ありと。嗚呼、佛菩薩の大慈善巧は、凡愚の計り知るべき事にしあらず。今此の寶鏡窟の如來も、行者罪障の輕重、信心の精麤に隨ふて、品々に拜まれさせ玉ふをおもへば、彼の島の念佛の魚に少しも違はせ玉ふことかは。熟らくと思ひまはせば、身の毛たちて恐ろしく尊く

て、頻に悲歎の涙こそこぼるれ。愚老杯も是れよりは遙か遠國の者に侍り、此の御佛の尊  
き御有様をほのかに傳へ聞き奉りて、あはれ佛神の冥助もおはせよがし、足を限りに彼の  
伊豆の國なる賀茂郡とかや云ふなる處までたどり行きて、彼の御佛の貴き御影なりとも伏  
しおがみ奉りて、後の世の事も歎き申度き事よと思ひつゝけて、いつしか廻國の姿にや  
つしなして漕れ來りて、同行三五輩、海士の小船のあやしげなるを請ひ借りて、諸共に窟  
中に入り、念佛して伏し拜み奉りにけるに。目一目見奉りて、伏ししづみて念佛しながら、  
ぐしぐしと泣出するあり、一目見奉りてより有難がりて感涙するも有り、一人は興さめ貌  
して方々は何を目あてに感涙して、さは泣き給ふぞ、おのれは唯たはのくらき斗りにて、  
物告そ見つけ侍らね、如何にもしてかたしるなりとも見届け奉りて、和殿原が如く有難  
かり度き事よとて、目おし拭ひ首ひねりまはしてかなたこなた見回はし、首を掻くもあり  
けり。愚老が其の時拜し奉りたるは、はの暗き中に、彼の光のちらちらとのみして、満月  
の御面も、青蓮目の御眸も見ゆ分ち玉はず、御佛の御影とおぼしきもの三たり立ち玉へる  
を拜み奉りて、少しは信心もさめ心地しけるが、定めて貴き事にやおはすらむと、有難た  
げに伏し拜みて佛念し侍りにたりき。飯り來りて熟らぐと思ひかこちにけるは、七旬に

近き者の遙々の旅地を、三途の罪障をも懺悔し、六趣の苦患をも歎き申度くて、さまよひ  
來りたる者を、御影をたにもはかしく拜まれさせ玉はぬことよと、少しは恨み申す心  
地もさしおこりにたりしが、返へして思へば、三界無比の大聖、十力調御じゆくごの如來にて渡ら  
せ玉ふものを、如何にや、憎愛差別の御心のおはすへきぞ。差別は卻て我が信心の深淺に  
こそ依るべき物を、淺狭しくも恨み奉りしことよと思ひ定めて、従前の罪障を懺悔し、當  
來の苦因を恐れ、至誠に專唱稱名すること半時、再度び彼の巖窟に入り拜し申けるに、  
光明も相好も以前には遙に遠はせ玉ひて、一際殊勝におがまれさせ玉ひける程に、感涙肝  
に銘じ侍りき。是れより思ひ入りて、澆季末代流轉常没の我等がためには、上もなき善知  
識にてわたらせ玉ふものを、尊容に別れ奉りて、頼みもなき露命に何地へかうかれ行くべ  
き。永く此の處に有りて、尊容につかへ奉りて、兎にも角にもなりはてたらんには、また  
なき勝縁なるべき物をと、處々の靈場れいじやうに詣ふで奉るべき望みも絶えはて、專唱稱名の外、  
佗事無く打成り侍りぬ。且又國々より御影拜み奉らむとて、暮ひ來り玉へる人々の、浪風  
打つゝきたる頃しき、參りあひ玉ひて、風波の靜まるを待ちわび玉へる人々のいたはしさ  
に、打寄り念佛して浪の晴れ間を待ち玉へがしの心に、處々勸進し申して、一字の草履を

營み、形の如く尊容を寫し奉りて、堂上に安置し奉りぬ。願はくは此の勝縁に答へて、我等も及び一切の人々も、諸どもに生死の魔網を破り、速に一心不亂の田地に到りて、唯心の淨土に生じて、己心の彌陀に值偶し奉らむことを。

惟時寬延第三庚午歲佛生日。沙羅樹下闍提老衲書。

### 寶鏡窟記終

#### 辻談議序

戲言細語。飯第一義。何況法說譬說耶。先師過古稀之後。舌鈍識慳。恐法施不及初機。依是。丙寅之夏。致々編書。名曰辻談議。所謂六道街衢。是菩薩道場。不起禪定。能入同事。攝者。即衲僧轉身自在之活。味歟。茲合紛引歌。以附梓客。普施初心道友。永爲當來之資糧。矣。囑々。

明和庚寅夏 豆之東嶺於洛東翫月亭書。



# 辻談議

白隱禪師

實相眞如の日輪は、生死長夜の闇を照し、本有常住の月輪は、無明煩惱の雲を拂ふ。勇猛の衆生の爲めには成佛一念にあり。懈怠の衆生の爲めには涅槃三祇に渉る。是れは是れは何れも云ひ合せて、今日は大勢よふ見えられた、近頃奇特におりやるよ。云ふに及ばぬ事ながら、去りては大切の時節なるぞや。推付け生死到來三塗の舊里にたち歸つて、叫喚（まよひ）、燒熱（あつ）、黒繩（くろじょう）、衆合（しゆごう）、紅蓮（べんねん）、大紅蓮（だいべんねん）の難所へ追ひ落されて、無量恒沙の苦患を受くる事は、まのわたりなるそや。相構へて油斷是れ有るへからず。向きに云はゆる實相眞如の日輪は、生死長夜の闇を照らすとは、昔し禁庭に端由有りて、内宮へ勅使立て神慮を窺はせたまひける時、恭なくも天照らす大聖神宮、一四句の偈を以て答へさせ玉ひたりける神勅なり。此の時にこそ神と云ひ佛と云ふ。唯是れ水波の隔て成るとは、初めて思ひ知られたるぞや。さる程に十方闍御の如來も勇猛の衆生の爲めには成佛一念に在り、懈怠の衆生の爲めには涅槃三祇にわたると説き置かせ玉ふ。作麼生か是れ即坐成佛の一念とならば、唯是れ勇猛

精進の一刹那ならんのみ。懈怠の衆生とは誰ぞや。我れも人も偶々受けかたき人身を受け、逢ひかたき佛法に逢ひながら、夢幻の如く千年も百年も生き果つへき心持ちにて、食ひたいやうに食ひ、飲みたいやうに飲み、寝たいやうにいね、あそびたいやうに遊んで、芥子ばかりの菩提心もなく、一升の事には五斗ばかりの腹を立て、五文か事には五貫ばかりの氣をもみ、頂上より足のうらまで全體、三毒五欲五臟より六腑を貫いて、總に是れ貪欲瞋恚、毎日朝よりくれにいたるまで、身三口四の十悪をつくり、かさねて負ひかたけて冥途に入る。其の初め死する時は、何の正体もなく、濃く寝入りたる如く何の覺えもなく、少らくあつて幽かに性根つきて、目をひらけば、いつくか冥府に落ち入り、死出の山三途の河原など恐しき難所の目さすも知らぬ暗き闇路をおほると五里も十里もたどり行くよと思へば、方量もなき廣き野原に出でぬ、此の所は月日の光はなく大火事場の如し。是れ皆焦熱大焦熱の猛火の焰のどつと燃えあかるものなり。其の中に罪人どもの透き間もなく群り居て、わつと泣き叫ぶ様あさましやかなしやな。我れくればはからすも斯くおそろしき惡所にしつみたるそや。娑婆にて斯くおそろしき處わりと露知らざりしやと。夢になりとも知りたらしかは、身を捨て命にかけても後世の願ひやうも菩提の求めやう

も有るへきものを、邪見惡智の人々の常に彼の天堂地獄などいへるは、根もなきそらごとくなるぞや。其の證據には開闢より以來終に一人も地獄くるしどて立ち飯りたるものなく、終に捨て文一つ越したる者なし。是れ決定して地獄天堂なき現證なるそや。縦ひ又有りても左ばかりの罪作りたる覺えもこそなけれ、人は殺さす火は付けず地獄へ落つへき種こそなけれ。若し罪なきもの落つる地獄ならば。それは是非なき次第なるぞや。人なみ人なみなるものを、我れも人も貴きもいやしきも知るも知らぬも諸どもに手を取り合ふて落つへきはと云ひしを口惜しや。面白く賢き事宣ふ人かなど貴く有り難き事に思ひなして、偶まうけかたき人身を受け、千生萬劫にも逢ひ難き佛法に逢ひながら、何の辨へもなく、さながら牛馬同前の心持ちにて、やみくると三途に歸るくやしさを。今はせんかたこそなけれ。見わたせば、貴きも賤きも、老いたるもわかきも、知るも知らぬも、皆盡く猛火の底に在りて泣き苦しむ聲は聞くに膽裂け心碎くるか如し。いにしへ貴き聖の常に嘆かせ玉ひけるは、一度三途に入りぬれば、二たひ歸る事そなきと念佛せさせ玉ひけるよし。實に貴き御教へなるとは、今こそ思ひ知られたるそや。又いつの世に閻浮に歸る事の有るへき、喉を濕すに一滴の水なく、口に投するに一粒の米なし。四方八面盡く皆猛火なれば、立ち忍

ふへき所こそなけれ。見渡せば、あれにて泣き苦しむ玉ふは、いたはしや我が父うへにておはすぞや。此方なるはまさしく我が妹なるぞや。おなたにて一處に責め苦しめられ玉ふは、上もなき貴き方々と見えさせ玉ふ。いかなる御錯ありてか斯くまては辛き目を見させ玉ふやらん。昔し延喜の帝様の簾か岩屋の日殿上人に對し云ふならく、奈落の底に沈みては刹利も首陀も替らさりけりと詠しさせ玉ふも、直に今日のあたりなるぞや。宮も鬮屋も大名も高家も地頭殿も代官殿も庄屋も名主も、皆盡く猛火の底にわくと泣き叫ぶ、中にも出家沙門圓臚方袍の尼法師などの、在俗の人々、劣らじ負けじと、叫喚衆合黒繩無間の底にしつみて苦しむ玉ふ。なかにも紫衣や紅衣の僧正あじやうや阿闍梨あじり和尚よ大善知識よなど、貴き人々のおそろしき獄卒の杖にうたれて泣き苦しませ玉ふを見奉れば、一際に悲しく最愛しくこそ覺ゆれ。娑婆にて談議法談などに極樂よ淨土よ水鳥樹林よ念佛念法よなど上もなき有り難き事とも説かせ玉ふを聞ては我等しきか境界には分にすぎたる事ともなるぞや。さばかりの高き望みは詮なき事なるぞと思ひ切つて、往生淨土の望みはさらくなくかりけるぞや。かくおそろしき所ありと少しなりとも知りたらしかは、豈に夫れ片時も油断すきべや。身を捨て命にかけても後世助るへき道しあらは勵み求むべきものを、口惜の

今のなれのはてやな。最初此の處へ覺えず落ち入りたりし時に、且つ驚き且つ苦しみなから思ひけるは、世に恨めしき物は世の中に數も限りもなき出家沙門の人々なるぞや。かゝる苦しき所ありと少しなりとも教へ給はば、かゝる不覺はとらざらましを詮なき極樂咄のみ仕聞かせ玉ひける故、今此のはてしもなき惡處にしづみけるぞや。かへすくもうらめしきは、世間の沙門法師原なるやぞと恨みかこちけるか、よく見れば彼の沙門法師原もかゝる所は露ちり知り給はざりけるにこそ。たくひもなき高位高官の僧侶紫衣紅衣の貴僧高僧達の、塵俗の在家に少しも劣らせたまはて、獄卒の手にかゝつて晝夜に責め惱まされさせ玉ふを遙に見奉れば、此の人々も初めより露知り玉はざりけるにこそ、兎にも角にもせん方なきはわれくか今のなれの果てなるそやなど、みなもるどもに聲も惜ます泣き叫ぶ聲は、天も崩れ落つへくこそ覺ゆれとは、彼の止觀珠林十五經などに説き宣へおかせ玉ふ大略なるぞや。人々よ油断し玉ひぞ、油断し玉ひたらんには、をしつけ憂目を見給ふぞきと。良薬は口に苦く、忠言は耳に逆ふと申せば、尋常の極樂咄ほごには面白くは覺ゆじ、なれども大地は打ちはづすとも違ひはなき物語なるぞや。

時に聽衆に一人あり、講座間近く進み出て有り難や貴やな。者回如何なる勝縁にやかゝる

不思議の勝會に逢ひ、未曾有真正の所説を承る事、かへすくも有り難けれ。澁季末代の習ひ、筋なき賤賣せんばいの鄙僧のぬれ手に粟の極樂唱しをのみ聞きて、來世は心易き事にのみ覺えて、毎日限りもなき罪業を積み重ねて、懲りもなくもとの三途の舊里へ立ち歸りて、無量劫數を経て果しもなき苦患をうくる事は、露知らずて孩提の童子の無智なるか如く、牛羊犬豕の昏愚なるに齊しく、徒らに日々衣食をのみ求めて、飽き足る果てしもなく、我れも人もやみやみを受け難き人身を失ふ事、飛彈の邊土の我々にかきらす、大凡扶桑六十州の間、西は筑紫博多の浦、東は都賀留合浦の果て、京も田舎も押し並へて、此の經の影にて佛になり、此の佛の徳により淨土に生る。一唱彌陀號即滅無量罪と有るからに、罪は何はと作りても消へ易きものを何程放逸に暮しても、佛には成りやすきものと心得て、心に任せて罪業を積み重ねて、何のわきまへもなく、月日を送りて貴さも賤さも皆盡く惡所に墮する世の中に、斯く未曾有の法會に逢ひ、大に驚き大に恐れて、俄に睡夢の覺めたるか如し。去りながら唯此の儘にて捨ておき玉は、何を便りにか生前限りもなき罪障を滅し、果しもなき惡趣を免かる、事を得ん。たとへば人の親の其の子を教へて云はく、汝が輩各々勵み進んで各々家業を勤めよ、必らず怠る事なかれ。油断したらんには、未には必らず

貧困に苦しめられて、辛き目を見るへきぞ。相かまへて油断する事なかれと種々教諭せんは、其の親兼ねて商法を勤むへき子には、宜しく金銀の本手を渡し、農業を勤むへきには、膏腴の田畑をゆづり與へて、而して後に汝等常に勵みつとめよ。油断する事なかれと云は、頭を叩いて命に隨はん。若し本手をあたへず田畑を譲らず、農を勤めよ商を勵めよと云はんに、其子何を便りとしてか農商を勤めん。今師我が輩に對し勤めよや、油断する事なかれや油断したらんには、死後には必ず惡所に墮すべきぞと教へ玉ふは、さながら金銀の本手をあたへず田畑を譲らず、只家業を勤めよ油断はしすなど教ふる親の如し。我が輩も又左の如し。何れの道を修し、如何なる善を行してか、油断なく勵み勤めてか、未來を助かるへきや。願はくは來世を助かるへき道しあらは、精しく教へ玉ひて、彼の恐ろしき惡處を救ひ助け玉ひてよ。熟らく願ふに世間一切の出家沙門を稱して、佛法僧の三寶の數なりと歸命し尊信する事は、常に無量の法財を積み貯へ、勤めて大法施を行して一切を利益し玉ふ故なり。我れも人も罪も報も曾て知らず、死して三途に墮する事も又知らず、恰も赤子のはらはひして井に赴かんに、盲者三人其の傍に在りといへども、夢にも曾て知らず見ざるか故に、救ひ助くる心なきか如し。末代の出家沙門も又しかり、因果報應も

曾て知らず、三途も六趣もさら／＼辨へなき故に、さなから盲者の赤子を救ふ心なきか如し。和尚大慈大悲宜しく是れを憐察し玉へ。予か曰く、善哉問ふ事、相構へて油断し玉ひぞ、油断し玉ひたらは、かならず三途にしづみ玉ふべきぞと唯云ひすておきたらんは、左なから赤子の井に赴くを見て、危い哉、此の子は果して井に落つへきそとのみ云ひて見捨ておくか如し。我れに神仙長生不死の大還丹、即坐成佛の秘訣あり、眉毛を惜ます汝か輩に傳與せん。謹んで精神を凝らして聽受し、打失する事なかれ。汝か輩即今外面五尺の形骸、男女有り僧侶あり、老幼あり尊卑あり媚醜あり、各々互に異なり。こゝにおいて憎愛妬害慳吝者執着雲霧のめぐり湧くか如く、波浪の漲り飛ぶか如し。三毒懐に溢れ、五欲胸に凝る、日々多少の悪業習を積み重ね、晝夜に六趣に輪廻し、死してはかならず三途に墮す、叫喚衆合黒繩無間の大苦患一身に聚まり責む、三祇百劫を経て休罷有る事なし、其の受苦心も言葉も及ふへからず。佛の云く、一切地獄の衆生の苦患、我れも詳に是れを説かは、閻浮提の衆生聞き得て、皆盡く血を吐いて死すへしと。寔に恐るへくまことに慎むへし。若し人如上三途の苦域を透過し、八難の險處を超越し、一起に如來地に直入し、涅槃の大彼岸に至らんと欲せば、謹んで精を静め心を凝らして、汝か臍輪氣海丹田の間を

點檢せよ、全く男女の相なく僧俗の形なし。老幼尊卑貧富醜媚一點の痕跡なし。是れ彼の黄成子かいはゆる至道の精杳々冥々たり、至道の極昏々黙々たる者なりや、こゝにおいて單々に點檢し、仔細に照顧して晝夜に怠らざる則は、いつしか思想盡き妄情泯滅して、玉盤を擲擗し氷樓を推倒するに齊ふして、たちまち身心ともに打失せん。此において轉た進んで退かざる則は、計らすも一旦豁然として貫通して、十方虚空なく大地寸土なふして、事物の表裏精麤盡くさすと云ふ事なけん。是れ彼の永平の謂はゆる身心脱落、々々身心。直に是れ古人の謂はゆる理盡き言葉窮つて技もまたきはまる。風金網をはれ、鶴籠を脱する底の好時節、隻手の聲を聞く事、白晝に掌上を見るか如し。長河を撻いて酥酪な成し荆棘を變して梅檀林と成し、鐵を轉して金と成す底の時節、人間天上の善果是れに如かず、縦ひ汝萬戸侯の富貴を得るも、黄梁一炊半熟の夢、富四海を保つも、死すれば必ず捨て去つて悪趣に入る。是の故に言ふ、富は是れ一生の財、身滅すれば即ち隨て滅す。智は是れ萬代の寶、命終れば即ち隨つて行く。大凡世間一切諸有の有情、王侯より庶人に到り、老幼尊卑、僧俗男女、馬牛犬豕、豺狼麋鹿に到るまで、正因佛性の大事を具足せずと云ふ事なし。是れを質相眞如の日輪と名け、本有常住の月輪と云ふ。是れを失する則は、六趣輪

廻の苦衆生流轉常没の凡夫となり、忽然として是れを得る則は、たちまち無上正覺を成して三界無比の大聖と成る。十方調御の如來と同し。此れ等の大事を明らめしめんかために、我れ常に人を勤めて隻手無聲の微妙音を聞かしむ。是れ彼の山姥か謂はゆる一丁空しき谷の響は無生音を聞きたよりとなるとは、是れ此の隻手の聲を云へり。今日は是れまで、明日また來り聞き玉へ。あめおこしあめおこし。

### 辻談議終

## 主心ね婆々粉引歌

白隱禪師

有がたいそや天地の御恩。あつささむさの程までも。夜と晝ともなふてはならぬ。ひるは働く夜ら休む。雨露の御恩で五穀もみのる。するの野山の草木まで。君の御恩は山より高い。賤がわらやのはてまでも。繁昌めされよ萬代までも。風に草木のなびく様に。わすれまいそや御主の御恩。遠きあの世の後までも。親の御恩は海より深い。恩をしらぬは犬猫じや。孝行する程子孫も繁昌。おやはうき世の福田じや。心短機な殿子の癖に。主の専途にや通はしる。忠と云ふ字を能く見れば。外へちらさぬ此の心。五尺餘のからだは持てど。主心なければ小童じや。武藝武術も第二のさたよ。とかく主心がおもじやもの。主心なければ明屋も同じ。狐狸も入りかはる。周の文武の太公望が。云ふておかれた名言がござる。武家の大事の三略の書に。驚悲亂りに起るはどうじや。武士に主心の定まらぬゆる。主心定まる修行じや。弓は鎮西八郎殿よ。鎗は真田よ太刀打や九郎。縦ひ此等を欺く人も。主のこころはの

専途の時に。主心なければ腰ぬける。主心至善二つはないぞ。常に正しき此の心。唐の大和の物知りよりは。主心定まる人が好い。武士を絹布で食はせておくは。主の専途の一と小ぐち。多藝多能も先つさしおいて。主心定まる場所を知れ。主心至善定まる時は。持齋持戒も外にやない。有難いそや主心の徳は。太刀や剣の刃もたぬ。弓も鐵砲も肩かぬからに。敵と云ふ字は更にならない。空も月日も海山かけて。土も草木も皆主心。神とまります高間が原も。五欲三毒ないところ。民を新にするとは云へど。至善定まるまでの事。出家も沙門も高位も智者も。主心なければ皆民じや。宮はわらやよわらやは宮よ。主心一つが潮さかひ。上下萬民主心があらば。治めされども世は萬歳。嬉し目出度や主心の徳で。うたぬ隻手の聲も聞く。悟り迷ひを口には説けど。主心居らにや何じややら。袈裟や衣で見かけはよいが。主心すはらにやひよんな物。四國西國めぐるもよいが。主心なければひだ道よ。主心丹田氣海にみつりや。仙家長者の丹薬よ。丹を鍊るには鍋釜入らぬ。元氣丹田にするまで。不死の丹薬望みな人は。つねに氣海に氣おけ。虚空界より長壽のものは。氣海丹田に住む主心。氣海丹田に主心が住めは。四百四病も皆消ゆる。主心お婆

婆はくつになりやる。わしは虚空とおないぞし。虚空おやちは死にやると儼よ。わたしやいつでも此通り。山河大地を我子にもてば。わしに不足な事はない。武士の身の上は覺悟がおもじや。生て一たび死ぬがよい。生て死ぬるは容易い事よ。主心お婆々に出逢てど。主の御恩で仕立たからだ。喧嘩なぞする不覺者。武士は憶病も忠義の一つ。一度主君に上おくからだ。我身ながらも自由にやならぬ。大事くと守りましょ。内證つさ合傍輩同士にや。狗と云ふとも腹立つな。主の爲めなら無間の底も。修羅も紅蓮も辭退せぬ。命限りに切込む所存。是れが勇士の常の住。主心お婆々はどころにござる。氣海丹田の裏店借りて。氣海丹田はどころの程ぞ。臍の辻から二町下。臍のくるりに氣が聚れば。どりも直さず大還丹よ。最も貴とや還丹の徳は。須彌も虚空も碎て微塵。十方法界實相無相。見られてもなく見てもなす。生死涅槃もさのふの夢。煩惱菩提の迹もない。墮してくるしむ地獄もないが。往いて樂しむ淨土もないぞ。此に一期の大事がござる。眞正得悟の智識に逢はにや。世間多少の修行者共が。二三十年難行苦行。思ひはからず此場に到りや。もはや悟つた大隙あいた。おらは是れから心の儘じや。殺生偷盜も氣遣ないぞ。五逆十惡

好いなくさみよ。因果むくひもないからと。邪見斷無の我儘悟り。よその見るめも恐ろしや。勵み求めし見性の法も。いまは地獄の種となる。もとの主心は皆消えうせて。魔縁天狗が入りかはる。過去の縁因拙い故に。終に真正の明師に逢はにや。悟後の修行の奥儀も知らぬ。もとの凡夫かいつそ増し。今は澆末法滅の時。邪見邪法の起るも道理。支竺扶桑の三國ともに。眞の禪宗は地に落果て。殊に怪しき邪法がござる。曹洞黃檗濟家も共に。善知識じやと呼はるゝわろも。人に對する說法を聞けば。眞正向上に禪法といふは。坐禪觀法に用事もないが。佛經祖錄も更に入らぬ。本地の儘なが眞の佛。佛求むりや佛にまよひ。法を求むりや法縛をうく。佛果菩提も夢中の夢よ。生死涅槃も飛ぶ鳥の跡。好きも悪きも皆打すて。本地の白地で月日を送れ。障りや濁るそ溪河の水。問ふな學ぶな手出をするな。是れがまことの禪法だ程に。見ぬか佛ぞ知らぬか神よ。是れを聞くより彼の大勢の。無智や懶惰の役坐のやから。扱ても貴い教化でござる。もはや是れから我々をば。思ひよらざる生佛じやと。くふてはこして寐るばかりじやと。並ひ睡るを脇より見れば。大勢並んで櫓を推すごとく。如何なり行く身の果やらん。佛法破滅の大前表よ。

悟後の修行とはどの様の事ぞ。お婆々知てならうたふて見やれ。是れは大事を御尋ねそふよ。五百年來すられた法じや。諸善知識も知らぬが多い。悟後の大事は即ち菩提。昔春日の大神君の。解脱上人に御告がござる。およそ俱盧孫佛より以來。たとひ天下の智者高僧も。菩提心なきや皆々魔道。菩提心とはどふした事ぞ。山まん婆女郎もうたふておいた。上求菩提と下化衆生なり。四弘の願輪に鞭打あて。人を助くる業をのみ。人を助くにや法施がおもじや。法施は萬行の上りよ。有がたいぞや法施の徳は。たとひ佛口も盡くされぬ。法施するには見性がおもじや。見性はかりじやちぶさがほそい。細いちぶさじや子は出来ぬ。よい子なければ跡絶える。隻手音聲もどめ得て置て。此で休するや斷見外道。次に千重の荊棘叢を。残る事なく皆透過せよ。お婆々死んでも何國へござる。とめてたもれよ帆かけ船。四十九曲り細山路を。直に通らにや一分たぬ。風の色香はどのよな物ぞ。次に夢中の祖師西來意。最後萬重の關鎖がござる。之れが禪者のむなぶく病ぞ。關鎖なければ禪宗は絶える。命がけても皆透過せよ。むかし黃檗運大禪師。常に嗟悼し惜ませ給ふ。扱ても牛頭山宗融大師。常に横説堅説はすれど。未だ向上の關鎖をしらぬ。關鎖



なければ禪じやない。鯉魚も龍門萬重を越える。野狐も稻荷の鳥居はこすぞ。流石ながし  
禪宗のめしやくいなながら。關鎖どはらにや分立たぬ。疎山壽塔に牛窓櫓。乾釜三種  
に犀牛の扇子。白雲未在みざいに南泉遷化せんげ。倩女離魂に婆子燒庵しやうあんよ。是れを法窟の爪牙と  
名つけ。又は奪命の神符とも云ふ。此等逐一透過の後に。廣く内典外典ないでんげいを探り。  
無量の法財集つめておいて。三つの根機を救はにやならぬ。三つの根機の其中く  
に。眞の種草しんそうを求むるかをも。眞の種草が眞實欲まことしか。法窟の牙と奪命の符と。  
鳥の兩羽を挟むが如く。是れがなければ種草は出来ぬ。是れが即ち佛國の因。とり  
も直さず菩薩の不行。たとひ虚空はき盡やると儘よ。こちらの弘願は果はてしやない。願ねん  
入いりぞよ千歳ちんざいの後も。ひとりなりとも當家の種草。婆々が心を能く參究せば。祖師の  
眞風は地におちやせまい。油斷めさるなおまめでござれ。婆々は是れから御暇申す。

(法窟集完)

### 主心ね婆々粉引歌終

### 施行歌

白隱・禪師

今生富貴する人は。前生に蒔おく種がある。今生ほどこしせぬ人は。未來は極めて貧なる  
ぞ。利口で富貴がなるならば。鈍なる人はみなひんか。利口で貧乏するを見よ。この世は  
前生の種次第。未來はこの世のたね次第。ふうき大小あることは。蒔たね大小あるゆゑ  
ぞ。この世はわづかの物なれば。よい種添らんでまきたまへ。たねを惜みてうゑざれば。  
穀物とりたる例なし。田畑に麥稈まかすして。麥稈取つたるためしなし。麥稈一升まきお  
けば。五升や一斗はみのるぞや。まかれはすこしの施しも。果報は倍くあるものぞ。  
況やほどこしおほければ。果報も多しと計り知れ。それゆゑお釋迦も觀音も。施しせよと  
すゝめたり。さすれば乞食非人まで。救ふところを發すべし。おのく富貴て持つ寶。  
有ればあるほどたらぬもの。おほくの寶をゆづるをも。持つ子か持たねば持たぬもの。  
少しも田畑ゆづらねど。持つ子はあつはれ持つものぞ。我子の警昌祈るなら。人を倒さず  
施行せよ。人をたふしてもつたから。我子にゆづりて怨となる。ひとの恨のかゝるもの。

ゆづる我子が沈みきる。升や秤や算盤や。筆の非道をし給ふな。つねく商ひするひとも。あまり非道な利をとると。死んで三途に入ることぞ。その身は三途に落入て。屋敷は草木か生ひ替る。非道は子孫の害となる。親の悪事が身に酬ふ。世間に敷くある物ぞ。一門繁昌することは。親が悪事をせぬゆゑぞ。もし又親にはなれなは。ますく重恩思ひしれ。子を慈しむ親てゝろ。あらい風をも厭ひしぞ。それほと親に思はれて。親をおもはぬおろかさよ。親に不孝な人々は。鳶や鳥に劣りたり。嫉む子をしつけるに。惜むたからはなきものぞ。親の後生の爲めならば。その金出して施行せよ。飢死ぬ人を助けなは。これに勝れる善事なし。たとひ萬貫長者でも。死んで身につく物はなし。妻も子供もせに金も。捨て冥途の旅立ぞ。冥途の旅立する時は。耳も聞かず目も見えず。ゆくゑしらすに門をいで。闇をやみちに入ることぞ。その時後悔かきりなし。兎角命のあるかぎり。菩提の種をうゑたまへ。命は脆きものなれば。露の命と名づけたり。今宵頭痛が仕初めて。九死一生なるもあり。強い自慢をする人も。暮に頓死をするもあり。けふは他人を葬禮し。明日は我身の葬禮ぞ。然らば頼みなき娑婆に。金銀蓄へなにする。富貴幸ひある人は。貧者に施しせらるべし。貧者に施しせぬ人は。富貴でくらすかひもなし。狗でも口はすぐるや。

飢人貧者を助くべし。慈悲善根はその儘に。家繁榮の御祈禱ぞ。慈悲善根をする人は。神や佛にまもられて。天魔外道はよりつかす。然れば祈禱になるまいか。よくく了簡せらるべし。悪施しならぬとは。餘りとうよく目にあまる。飢死ぬ貧者を見ぬ振に。暮すころは鬼神か。慈悲善根のなき人は。子孫繁昌長からじ。寶はあまりはなきものぞ。施行で借錢し初めよ。それこそ眞の信心よ。上たる人をはじめとし。頭立たるひとくは。われもくと共に。厚く施行に身を入れよ。貧者の命救ふなら。廣大無邊の善事なり。平生貧者に敬はれ。身につく果報あるまいか。人の食物すつるのを。好んで捨ててく貧者は。前生に種蒔たらぬゆゑ。是非なく袖をすることぞ。かゝる有様見なからも。かのかく仁心起らぬか。とにもかくにも人として。信心なければ人でなし。此節信心かこらねは。益く牛馬にことならず。

### 施行歌終

## 安心法興利多々記之序

此書を零餘ぜろじゆと名號なごう事、自己來源臘月八日の煤拂にして、頓て西方淨土の春に立歸るべきところなるべし。洛西祥光寺の俊風和尚は、淨土門の碩徳にして、側ら顯密禪に通ず。一とせ駿州原の白隠禪師に謁して、問答數段の上、一首の道歌を呈せらる、「紫の衣の色を耳に見て隻手の聲を目にや聞らん」。禪師之を賞して、和尚の深く六字の淵源に徹するを證明し、一肩の僧伽梨を附し、又書を戯作して贈り申されける。今兩師既に遷化ありて年あり、空しく紙魚の餌となさむも心なきに似たり。よて櫻木にちりはめて、稱名懈怠の眠りを覺さん事をはかるものならし。安永三年春三月下旬

# 安心ほこりたゝ記

白隠禪師

〔華嚴〕釋尊成道の後、最初三七日間、七遍九會に説き玉ひし經なり。

〔阿含〕この經に拈阿含、中阿含、雜阿含、長阿含の四部の別あり。是は凡夫をして羅漢の悟を得せしめんために説き玉ひしなり。

〔方等般若〕方等は維摩、大集等の諸經なり。般若は般若經なり。

歸命頂禮御釋迦如來。やれく皆さん聞てもくんない。おらが親仁を何國の御人も。悉多太子がしらぬが佛か。若い時から商ひ好にて。親の譲りの家も位もすぼんと打すて。十九の年から山へはいりて。迦蘭羅阿羅々の二人の仙人。師匠と頼みて菜摘水汲薪を樵きりてな。奉行勤めて元手をこしらへ。三十年目に初て店出し。華嚴と名つけて結構な代呂もの。賣てみたれば。文珠と普賢の二人は買たか。あまり高くて其餘の御客は。盲か聾か見向もせぬから。是れてはいかぬと分別仕替て。阿含と名つけし安もの賣かけ。口上ひねれば店さきせはしく。御客か来るやら得意か附くやら。ろこで追々代呂物仕入て。商ひ手廣に方等般若に。法華涅槃と御客の機を見て。夫々あてかふ商ひ上手に。須達と名をいふとえらい金持。滅法にほれこみ。祇園精舎と名を呼ぶ屋敷を。御釋迦にあてかひ店出しさしたら。早速其名が諸方へひろまり。とてつもないほど商ひ繁昌。天上天下に一人親仁だ譽めてもくんない。其時妙法秘密の精藥。法華の一法盛んに流行て。御若い幼穠おんりゆう龍女と申すか。こ

安心ほこりたゝ記

(前文) 八歳の間  
女深く禪定に入て  
諸法を了脱したる  
ことは、法華の提  
婆品に見えたり。

れを買請とつくり吞込。成佛したとは我等の婦とはえらい違ひだ。又々其時阿闍世あじきと申した無敵の王様。提婆達多と心を合して。御釋迦の店をは仕舞てのけよと。己か母者人韋提希夫人を。牢屋へおしこみ。御釋迦の代呂物買はさぬ了簡。そこで夫人は不樂闊浮と此世を厭ふて。智慧も元手もござらぬけれども。五障三従かさなる大病。をほも薬があるなら下され御頼み申すと。遂に向ふて御願なされば。御釋迦は承知で五三の桐だよ。此様な客が大かたあらうと。四十餘年の長の月日を。御藏へ納めて仕込ておいたが。さらは是れから賣かけましよう。阿難目連の二人の手代を。左右に召連れ王宮さしてな出現なされて。韋提希夫人に彌陀の本願他方の稱名。五劫兆載思惟の薬味を。ひとつに合した六字の丸薬。一向専念産前産後にさし合ござらぬ。智慧も元手もさつはういらぬ。口にまかせて唱ふるばかりだ。心想事成劣未得天眼。智慧が虚弱で元手のならない。御脈も見ぬいた五障の重病。まして難治の極重悪病これらの性には。是れより外には用ゆる薬は。さつぱりないかと御勧めなされた。夫人は元より五百の侍女まで。無始より以來さとりし罪業。煩惱疑惑の瘴氣の持病に。三世の諸醫師もお匙を授けたり。其場で現益阿耨多羅。汗が流れて即日平愈。なんと皆さん六字の丸薬用てみなさい。元手のいらぬか肝心要た。あんな

り無造作で祖父婆々だましの店代呂物かまらつくり疑ひ。何ぞ利口な物はないかと知に識問ふたら。直指人心見性成佛。御釋迦が則ち莞爾と笑へは。迦葉が莞爾と笑ふた請うり。是れか本法一嗣相傳。實の眼を開いて看れば。御釋迦も我等も是は何物。本來面目無一物とは。こりやとえらい堀出し物だ。坐禪を始めてやりかけましたか。膝がぶりくぶりつきますやら。眠りか来るやら。背をどやされ大きな御目玉。爰がなんでも心抱所と。きばつてみたれば。三年むかしに隣りへかしたる黑豆三合糠一舂。思ひいだして妄念山く。これも我等が性にあはねへ。商賈かよと眞言秘密を。どの様な物だと尋ねて見たれば。阿字本不生で自身の胸にも阿字が備り。羅字は元より差別とわかれて。五智も五次も金胎南部も。此胸一つで父母の腹から生れた所が。直に佛の位でござんすと聞くと其儘。オンアボキヤなすとやりかけたれども。元手も持たずに自力の商賈。阿字なものにてさつはうしれねへ。そこで圓頓妙法蓮華即心成佛。扱ても無上の妙劑なれども。我等が根機に及ひもないゆえ。題目ばかりの功能看板。讀でみたれと元手がないから代呂物買はれず。四十餘年の未顯眞實。何の事だと求めて見たれば。六字の名號は法華經の略にて。藥王品には妙典八軸吞込時には。西方極樂阿彌陀の淨土へ。生れて行くすと説てはあれども。何も勘定だ廻

りくして遠道せうより。路銀のいらぬ南無阿彌陀佛を願ふか近道。なんと皆さんさうてはないかへ。鼠衣で二食でくらしして戒行持つは。始末勘定利口な算用。まかし我等は蚤も虱も。とらすにおかねへ。手をは出して盗はせねども。心に欲しくて目かけに持たし。婿もなければ子種かなくなる。虚も少しはつかねはならぬし。酒も香まねは婚禮振舞。萬事の附合世間が渡れぬ。何と是れては五戒か持てぬ。外の商買仕様かと思へは。根機と元手がなくては出来ねへ。どうでも親父の教へに歸りて。元手のいらねへ六字の商買。我等か根機につきり合ます。出し元手が澤山あるなら。自力の商ひなされて御覽じ。細い元手じや一向いけぬ。棒でも折つたら逐地も去地も茶の木畑で。御迷ひなさんぞ。昔し咄しを聞ても見なさい。諸宗の祖師達。智慧も元手も澤山あれども。六字の薬をお捨はなされぬ。まして我等は。智慧も元手も根機もないから。自力の燈他力の御船に。乗るより外には分別でさらぬ凡夫が其儘佛に成るとは。石や瓦が不思議に變じて黄金に成るのだ。夫れが嘘なら御寺の坊様に尋ねて御覽し。何と皆さん嬉しいこんだぞ。儒道や神道や心學なんどの。外商買から。あきない敵で。いろくさまく悪口いへども。我等が親父の仕にせの商ひ。格段違ふてとえらいもんだよ。根元本家は天竺横町。夫から唐土日本へ店出し。八宗

九宗と弘めた代呂物。いやだといふたらそこらに居られぬ。恐れ多いか上々様でも。御用なさんと六字の丸薬。朝夕忘れず用て御覽じ。四海靜かに現當繁榮子孫長久。今世の祈禱も來世の利益も。是れに過ぎたる薬はないぞへ。虚はつかねへ是れ皆御釋迦の味噌では御座らぬ。本法の事だよ。ホ、オイホウく。

明和 元申年十月。

沙羅樹下

關提翁述

安心ほこりた。記終

# 大道ちよぼくれ

白隠禪師

きたく、やれきた、それきた、またもござらぬ、さうくござらぬ。命頂禮、みなさんき、ねへ、人々御所持の心と云ふやつは、是れぞと申してしつかと致した、目鼻も手足もござらぬながらも、扱てく自由なわろめをやりやるよ、云ふに及ばぬこと、は思へど、千年万年此の世に暮すと、思てござるかうかくするまに、一作中やんがておみやれ、無常の使が迎ひにござると、一作師走が俄に來た様に筋氣じやあるまい、うろたへまわつて、忙しうだよ、連られ行くのをまんざら見ながら、錢金持たねば、人ではござらぬなんぞと心得錯り、欲徳ばつかりを頭一作先の皿から、かゝどのはて迄、立つにも居るにも、一本この句なしちつとも忘れず、偶々難得人間世界へ来たこそ幸い、其の上あまたの貴き聖の尊みたまひし、五倫五常の大きな道筋、一本この句なし善惡邪正も、あまらざるらす説き演べ玉ふて、置れしことなりや貴きことだよ、昔くのすつと昔の、まだしも此の世の出来ないさきから、一作今年今日まで今年今月即今日、數へも及ばぬ年を経たれど、ちつとも減らず、うつとも増つらず、末世になるほど、神や佛は彌くたうとく、

〔阿闍〕梵語、此に信不具とのよ、此人、因果を撥無し、

かつかういや増し、威光もいや増し、思へばくどうでもきやつらは、一作也親玉かぶせやよ、  
若しやれ皆様、一本この句なし悪事正根のしつばうさだきり、神や佛のちよろしく寵愛し玉ふ、正直正路の  
結構な悟を、ちつともなりとも、そつともなり共、求る心がきれば幸ひ、相應に勵んで  
出精めされよ、おみさん方のおしやますことには、悪事を申して、外てはあるまい、人を  
ば殺さず火付けや盗みは、元より爲まいし、何か因果で、死ぬと地獄の、青鬼赤鬼斑鬼の  
と、根もなき虚言聞く耳塞いで、白木の凡夫が無事は貴人と、御飯の三杯喰べるに任して、  
鷓鴣や狸々のしやべくる様だが、一作知らぬ微細の様子は、夢にも見ないで、一本以下廿四字なし理窟と我でふす口先は  
つかり、本に誠に道理はしらない、たとへはしつても、行ひ悪しけりや、何んにもならぬ  
い、薬を吞まざる病人わらには、扁鹊善婆等も匙なげ捨つ、天窓を摸いたる様なるもん  
だよ、夫故佛も、縁なき衆生は濟度は仕られぬ、一作出来ぬ阿闍提だのなんかんのとて、くどくもく  
もどく説演べ玉ひて置れしことじやう、阿闍提とは、どうした人たよ、どの様な人だ  
よ、一本以下二十二字なし問はるゝやからへ答て申さば、あせんだいとは、外にはござらぬ、問はるゝこなたが  
阿闍のきつほん、茲等の大事は、十代傳はる黄金の釜より秘藏なことだに、たやすく心得  
あゝでのこうての、すじつたもじつた、なんぞと理窟てやつても、大事に臨んで、なんに

願倒邪見にして、現在未來の業報を信せず、當に地獄に墮して出期あるとなく、恰も重病の終に治しかたきか如し。

もならない、大事を申して外でもござらぬ、一本この五字なし前にも所謂冥途の方より使がきた時、理窟で  
行くなら、どう共こう共云つてなおみやれ、其の場に臨んで、四も五も云はせず、時刻が  
移ると、閻魔の目玉の庇ひさでがつんでる、なんぞとぬかして、引立て行くそや、皆様せつない  
こんだよ、一本以下廿一字なし一から十迄めがきにあがいて、うろたへまはつて現世がこうでは、一作なら未來も大方  
ろくでは有るまい、神や佛はやれく不便や、何ぞ不助けてやりたい者じやと、涙を流し  
ていたわり玉へど、自業の罪過は、どうでも遁れぬ、かうじやによつて、皆さん必ず油斷  
をめさるな、魚の中でも、鯉と謂ふやつは、理口なやつめで、ありやくよいやな、とつ  
こいさど瀧津瀬登りて、龍ともなるげな、狐も稻荷の鳥居をひよつくらひよつと、飛びこえ  
神にも成るげな、鳩めはグウく、愚痴なるながらも、三枝の禮をば、見事に勤める、雀  
はチウく、忠義の一道、鴉はカアく、反哺の孝行、夜晝鳴けさる、耳にも止めず、明  
ても暮ても、一本以下四十七字作口から年食の出ないを幸い手前勝手云ふとはかりが人では御座らぬはあスウく云ふこと計が人でも有るまい、立つにも居るにも、ひよこくひ  
よこつく事計が人ではないぞと、魚めや鳥にも劣ると云はれちや、一分立つまい、本に誠に  
立たずと思へば、本へ還つて、孝悌忠信行ひめされて、人とおなりやれ、本に皆様神に成  
るにも佛に成るにも、人からならねば、成り様がござらぬ、一本以下十一字なし本に誠にめんとな事ない、以



の字も呂の字も知らない祖父様も、惠の字と壽の字も分らぬ婆さまも、南無からたんのう、  
 如是我聞、一字の、阿蘭陀交りの長物語は、必ずよしなよ、夫れより平日たやすく、慈悲  
 心正直堪忍、三つをたもつて、出る息入る息、無理せぬ様にと工夫をめされよ、しかつめ  
 らしくも、一本以下十八字作取年行年、百八煩惱手に取めざる、念珠は、百八出る息入る息、數珠くりめざる、根本があつば  
 れ、阿彌陀の正体成るや、あんまり近くてあきれたことだよ、困つたことには、人々御  
 所持の心といふやつは、おてこてんより替るが早いや、正直正路の貴人に向つちや、慇  
 懃丁寧なしやツ顔なしたり、御主や親には、不情なつらつき、女房や子供にや、鼻毛をの  
 ばして、外目もあんまり阿房な様だよ、金借る朝にや、地藏に化けたり、請る夕にや、閻  
 魔もはだして飛ぶ様なつらつき、瞬きするまに人事云ふやら、焼もちやくやら、いや早や  
 をへない事だよ、扱て又雨風雷電なんどは、天の制度の事とは申せど、分てもく、恐れ  
 おのゝき、謹むべけれど、然るを己が勝手に悪るけりや、一本以下十九字作今日の却て罵しり、怒りを起して呵し  
 たり、罵つたり、おへない天氣だ、どうじやどうじやと、恐れ多くも月日を指さし、其上  
 向つて小便たれたり、一本作天地に向てなにからなにまで天地に背いて、大膽ばかり「自分の意見で日ふよ  
 を知るより  
 り外には、教の道とてなんにもないや、なんとかく、おそろしうさよ、おら、はと

うしやうチ、イ、一本作たうは當感注意くく

○右白隠老師大道彌模暮。項見稱天目之作者。將信乎疑乎。具眼者看取矣。只今要利益而  
 書寫已耳。

大道ちよぼくれ終

# たたふく女郎粉引歌

白隠禪師

『女郎の誠とたまごの四角』

みそかくの能い月夜』

天じやくと皆様おしやる。てんのとがめもいやてそろ。文のかすく戀ひてかやても。  
わしは當座の花はいや。數の男の思ひもこはい。見目の好いのも氣の毒じや。器置好いめ  
と譽めそやされて。男ぎらひのひとり寝を。命取りめと皆様おしやる。わしは命はどらぬ  
もの。那須の與市は矢さきて殺す。おおくか目もとて人ころす。かすの殿子はかぎりもない  
が。わしがいとしはたこひとり。婆々か粉歌はおもしろか。おくかしらべは知りやる  
まい。知音としなら歌おもよいが。やはな客には御遠慮めされよ。

歸命頂來七佛傳來。我等の親玉釋迦牟尼如來も。僅と聽くより首だけ舐り。戀にこかれて命も抛ち。肝心要の小歌の文句を。老男さん老女さん皆様聞ない。諸行は無常じや是生滅法。生滅滅已で寂滅爲樂と。有つてもしれぬで弘法大師が。いろはにほへどに解て置かれた。夫でもすめずは楞木連坊主が。大小取雜段をきかんせ。眞に浮世は墓ないものでな。人間萬物山でも川でも。日月星辰竹木世界も。花咲や散ります盈れば腐ます。生れりや死ます有るもの無くなる。うれでも皆様千年萬年。此の世に居るやと思ふてごさるが。うろくする間に無常の嵐が。何處から來るやら俄に起ると。鬼ども組むよな剛機な男も。天人みるよな美ひ少女も。出る息一回止るが堺で。最早傍へもよられぬ容だよ。そこで地水火風の四大は。元へ歸て無くなるやふだが。さしひき殘て一つの含藏識。一生なしたる善業惡業。これには本より形がないから。土にも成らねば灰にも成らねば。善業は善所へ惡業は惡所へ。幕が替りて衣裳を著かへ。因縁次第で六つの衢の。天堂人間地獄や餓鬼趣や。牛にも成つたり馬にも成つたり。死んだり生きたり常り無ければ。この道理で諸行は無常しや。是生滅法と申したものとよ。是れても透切安氣はならぬと。佛や菩薩の教にしたかひ。精しく進て修行に身をいれ。貪瞋痴慢の根を斷枯して。六道生死の縁が切るれば。これが即

ち生滅滅已で。こゝに到ると此の身がこのよと。眞實無相の安閑恬靜。月を枕で虚空に安臥。華藏世界を一目に見晴し。身心清淨諸境も清淨。寂滅爲樂と有るのはこれらだ。そこで夫から御釋迦やあみだや。觀音地藏と肩臂ならへて。誓願度生の手船に掉さし。十方世界に神通遊化して。現世は勿論無始劫以來。父母兄弟伯父や伯母の。六趣に迷へる苦患を救ふて。皆々安樂世界へ導き。生老病死の根も葉も拂ふて。七寶莊嚴の臺に坐せしめ。百味の飲食自然と備り。天の羽衣意のままにて。天人聖衆と尋常伴ひ。微妙の音樂耳をば慰め。五色の天華を詠て遊ばせ。畢竟は佛にするじやが。何と皆様望はないかよ。眞更否でも無いならきかんせ。人々御所持の心といふ奴。これぞと申してしつかと致した。目鼻も手足もとせぬけれども。扱てく自由なわるめでおじやるよ。佛も生出す地獄もあみだす。それじやて皆様油断はならない。先にも云ふよに無常な浮世で。老男や老母は云ふにも及ばず。若い達者な息子も娘も。直に今夜が未來に成るやら。どうやらどうやら知らない身の上。浮假して居ちや不理ものだよ。否でも應でも忽ち此の世を。老も若も振捨ゆくのぞ。承知で居ながら余所目に見除て。頭の顛から跟の跣まで。五欲を粧ふ心のすがたを。鏡に寫さば二た目と見られぬ。千萬劫にも得難き身を受け。人間世界へ生れて出な

から。餓鬼修羅畜生地獄の振舞。起つにも居るにも名聞我慢で。朝から晩まで晩から朝まで。高いも下いも財欲色よく。一心曇らにや明い世界を。眞暗くらく闇處境界。本來阿彌陀と同躰佛をば。十惡八邪の不淨をぬり付け。渾然境余汚して仕舞て。我と我手に地獄をこしらへ。而て皆様御謂ます事には。惡事を申して人をば殺さず。火付はせまいし盜は致さず。是等の外には有るまへなんぞ。口ざき計の理屈はよけれど。見惑思惑の微細の様子は。根から葉から御存知あるまへ。設ひ知ても行作か悪けりや。眞坂の時節に用には立つまへ。眞坂と申してどうした時なら。冥途の方から使の來た時。理屈でゆくなら何也斯也。言ひ分け斷り申して御みやれ。其の場に隨て四も五も云はせぬ。時刻が移ると閻魔の目玉に。庇かつん出るなんと。節り。忽ち未來へ引立行くや。其の時皆さん一から十まで。周章騒で胡亂へ廻れど。泣くより外には仕様もあるまへ。夫から行くときや如何なる處じや。どうでも大形好事あるまへ。自分の懐中自分に承知じや。御膳の下から簞用してみて。心で意に異見を御附やれ。藥を飲まない病人とものには。耆婆扁鵲でも療治はと。かぬ。夫故佛も縁無き衆生は。濟度は成ぬの無佛性じやの。何じやのかじやのと阿て置かれた。無佛性とは如何なる人じやよ。斷見常見世知辨解怠の。因果の道理を辨へ無くして。

三毒五欲の我ま、放埒。釋迦の教の十善五戒も。天照大神の六根清淨も。孔子の示しの五倫や五常も。擲着没着に言ひ捨見捨て。用ぬ族を申したものだよ。是等の類が世間に多くて。夫故地獄が野多衛多繁昌。虎の皮をば禪に糾めたる。赤鬼青鬼牛頭等や馬頭等や。目にこそ見ぬねと此の身に付きそひ。如何な貴き上々様でも。船士馬子等も長者も乞食も。悪心邪業の重いか軽いか。具に發らす鐵牒に記して。毎朝毎晩註進致せば。閻魔大王や十王其餘の。冥官皆々集り給ひて。御評儀極れば命を奪取り。娑婆の親子や六親眷屬。別れを哀み歎くも厭はず。さあ來たく悲畏々々々々。悲畏火の車に引立乘行き。葬津河原で裸にひんじき。裾もさせずに跳で驅たて。閻魔の御前へ引据えませれば。向に立たる淨波梨鏡に。娑婆に居た時身口意三つで。造て置いたる罪業發らず。分明的然うつりて見ゆれば。右とも左ともいさご云はれぬ。そこで逐一吟味か丁れば。夫々役目の獄卒等が請取。一百三十六所の地獄へ。罪人共らを各々驅ゆき。業風烈しき爐炭の焔で。天も焦るゝ大流猛火の。うづまく鑊湯火坑を擣へて。逐込投込茹たり蒸たり。悉皆割木の燃見るよに。黒人まがへに焦たる體を。鐵棒につんざし曳きづり出して。鐵の臼碓にて搗いたり抹いたり。大盤石にて背を壓したり。金箔打よに五軀を打のべ。鐵作りの牛にも馬にも。

犁曳せて鋤わり耕し。或は獄門磔などして。銅柱に手足を打ちつけ。鐵爪鐵嘴の鴉や鷹等か。目玉も陰玉も突き啄み。其の外無量の阿責の模様は。八寒八熱刀山劍樹や。叫喚衆合や黒繩血の池。逃ては出られず死ぬにや死れず。苦み號て嘯々と泣く聲。天地にせまりて震動電雷。其が十日や二十日じやなへぞへ。百千萬劫晝夜を分たず。ちよつと慰する暇もないげな。眞に誠に話にするさへ。身の毛が豎て戰慄とするよだ。何ぞ皆様怖はくはないかよ。扱て又修羅や餓鬼趣の苦患は。畜生殘害驚怖の次第は。色々様々語るにや盡させぬ。そくて其のよな責苦を受ぬる。罪科の族は此の世に居る時。如何様をうした悪業を成したる。報じやあらうと思ふてみさんせ。餘所の身の上計りしや有るまへ。即人々心の樂屋は弄玉つかひの手妻を見るよに、右から左へ替るの早さは。有徳高位の人前銚て。慙慙叮嚀殊勝な目元も。主人や親へは不正な面つき。女房や子供に鼻毛を延すも。脇目に餘り阿房な様だよ。金借る朝にや地藏に化けたり。戻して呉れいと聞るゝ夕にや。閻魔も負賣出しそな怒面。瞬する間に總來と替りて。慚慢無作法人をば悔り。詔曲追従己を欺き。天道化育の心に背て。殺生などは無慈悲の極頂。物の命で妻子をやしなひ。口に嗜みて我身を娛しみ。設ひ手がけて殺しはせいでも。害ひ惱めて難義をさせつゝ。苦み傷むを不便と

思はず。渠等も親子や夫婦は有るのに。我身を抓て痛さも知れぬか。向の患は厭はぬ身がつて。錢金持たねは人並ならぬの。浮世は渡れぬ杯とこゝろえ。強盜逐劍壁きらないでも。算盤筆先不直のとり遣。滅多野多羅に強欲かはいで。神のものでも掠る分別。先祖や主君の御影も忘れて。一門朋輩犬猫まじはり。舅姑が白眼は娶女も青髓。不實不孝の火と火を摺合ひ。惡口雜言無慚愧千萬。夫等が惚て二張の弓曳きや。婦等も持で兩樹つかあて。ちよつと脇から焼付けられては。胸を燃して焼餅やきつ。火の手が上れば忽ち狂亂。折節頼に角をも生して。縊溺死が榮でも有るまい。巳が邪見か氣儘にならぬと。餘所の專造説言陰言。謗り謗られ互に腹たて。人をば落して自分が身揚り。我他彼此く争論。悲恨が募れば截たり伐たり。博奕遊俠亂酒に耽りて。親の命もちぢむる逆罪。何から何迄大膽而已。これらは皆々惡趣の種蒔。折角過去世で善事作したる。功德の果報で此の身は得たれど。死ぬと未來は必定地獄じや。夫故佛はやれくさびんや。一切衆生は皆是前世の。父也母也恩ある族じや。何とぞ扶で遣りたいものじやと。泪をこぼして勞りたまへと。自業自得の罪科はのがれず。心の田地に蒔置く種じやて。萌切り生出て一粒萬倍。無間の苦患を受けねばならない。それが否なら今日今から。人間根生にきりかへ直して。神や佛や聖

人君子の。教の道理を肯ひ辨へ。孝悌忠信獨をつししみ。信心怠けず修行を仕ますりや。差して難義な譯でもごんせぬ。魚類の中でも鯉とや申して。利發な奴めは禹門の瀧をば。一心勇猛勵ですゝめば。登りかかせて龍とも成るげな。狐も稻荷の鳥居を偪起。飄と飛越しや神にもなります。鳩めは苦空無常をとなへて。三枝の禮義も見事に勤むる。雀はちらく忠義を囀り。鴉は孝行反哺のやしなひ。折節見ながら御目にもとまらず。尋常聽ても御耳へいらぬか。鳥類魚類や四つ足なにも。劣ると云はれちや一分立まへ。良から底から立たぬと知たら。憤激起して心入れかへ。飯崇三賢先祖を敬ひ。兩親舅姑に孝行第一。夫婦愛敬別諍を守て。昆弟友子の禮容したしく。親類朋友信を闕さず。貧賤病苦の族を慰み。分限相應家業を持いで。國王領主の掟に順ひ。慈悲と正直堪忍三つを。自身に勤めりや人まで見習ひ。教へず自然と導き進ませ。上下諸とも和らぎ睦びて。毎も莞々笑てくらせば。佛神天地の御意にも協ふて。八百萬神梵天帝釋。大黒毘沙門御守り給へば。惡鬼邪神は何處かへ逃げうせ。無病息災延命長久。天下泰平五穀も成就。御家も榮へて善子も出來ます。猶又皆襟朝夕忘れず。摩訶般若や南無阿彌陀佛も法蓮華經も。皆是無明の根を切る刀じや。口から出る聲御耳へ入る上に。諦々御となへなると。煩惱

妄想近々消はれて。自然と三昧發得して。念々佛心佛心念佛。こゝを去らずに往生淨土にや。またしも近路坐禪が何より。望な御方は大善智識に。眞實篤り參禪しめされ。こゝでいふても書いた牡丹餅。聴いた計りて御腹は飽れず。水も飲まねば市販知らない。六凡四聖も唯この一心。一心悟れば娑婆即寂光。一心迷へば即ち三途にや。返すくも御油斷なるな。今にも無常の嵐が起ると。暫時待つてと云ふ間はごんせぬ。次第くも一時く。後へは遠うなる前へは近なる。死で此身はさうなるかうなる。平生忘れず覺悟が肝心。諸佛菩薩も昔は凡夫にや。さうでも彼衆は覺悟がよかつて。萬徳圓滿成就し玉へ。衆生濟度が御自由自在にや。然れば各々彼衆を見ならへ。寶の山にて空手を振すも。自分くも覺悟を窮めて。渴に臨んで井戸掘せぬよに。希ふ皆様この一大事を。聽分け咽分け打捨ておかすも。菩提の道を踏んこみ求める。御志をば發して給なへし引

をたふく女郎粉引歌

明治三十一年七月廿七日印刷  
 明治三十一年七月三十日發行  
 明治三十八年五月十五日三版發行



編輯者 平本正次  
東京市神田區駿河臺四軒梅町十番地

印刷者 椿市太郎  
東京市本郷區湯島一丁目二番地

印刷所 株式會社 葆光社  
東京市本郷區湯島一丁目二番地

發行所

東京市神田區駿河臺西紅梅町十番地

光融館

(電話本局二千九百九十九番)

# 光融館出版書籍大賣所

東京神田	東京	上野	岡崎	渡邊	有斐	中野	三省	文庫	田中	盛春	森分	岡崎	林平	大倉	東海	北隆	松村	服部	春祥	鴻盟	福島	通俗	森江
東	上	岡	渡	有	中	三	文	田	盛	森	岡	林	大	東	北	松	服	春	鴻	福	通	森	
京	野	崎	邊	斐	野	省	庫	中	春	分	原	平	書	堂	館	堂	書	堂	社	屋	館	書	
下	浅	同	同	小	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
草	谷	草	草	石	石	古	古	古	古	古	古	古	古	古	古	古	古	古	古	古	古	古	古
三	浅	玉	盛	杏	鷄	其	文	永	川	一	伊	郁	貝	出	興	顯	爲	法	吉	吉	積	甲	
倉	倉	水	文	文	文	中	光	東	東	藤	文	葉	雲	雲	道	道	法	田	田	岡	善	雙	
屋	屋	屋	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	院	院	院	館	館	助	支	治	
熊	福	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
本	井	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
長	品	酒	日	宇	學	中	目	西	西	朝	高	鶴	藤	有	勉	倉	天	伏	柳	微	富	今	
崎	川	井	新	都	海	田	黑	口	口	澤	美	林	崎	隣	強	野	野	正	正	古	貴	泉	
次	太	安	安	宮	宮	十	十	六	六	喜	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	書	道	
郎	右	兵	兵	源	源	平	平	平	平	太郎	館	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	道	

## 光融館出版書籍目錄

文學博士上田萬年君序 文學博士芳賀矢一君序文 織田得能師著  
**法華經講義** (三版) 和裝映入全八卷 定價三四五十錢 郵送料二十錢

本講義は織田師が雄快痛切の辨を以て深玄微妙の奥義を發揮せられたる者也  
 高津柏樹翁嚴密校訂 松崎覺本師參訂編輯

天桂禪師提唱 **碧巖錄講義** 全 (三版) 洋裝二四五十錢 郵稅十五錢  
 承陽大師以後の碩學天桂禪師が殺佛戮祖の巨眼を以て提唱せられたる珍書也

香月院深勵講師說 曾往院頓慧講師說 小栗栖香頂師校閱

眞宗 **教行信證講義** (再版) 全廿五卷 定價七圓 郵送料五十錢  
 眞眞大師立教開宗の基礎を兩師が正信の眼もて偏頗無く宗義を發揮せられたるもの也

**維摩經講義** (四版) 島地默雷師述 定價卅八錢 郵稅四錢  
 本經は大乗佛敎の極意を島地師が平易に論理的に講ぜられしもの初學者讀て益あり

**原人論講義** (八版) 大内青樹居士講述 定價廿五錢 郵稅四錢  
 人は何れより來り何れに歸るかを問答的に内外諸敎に涉て平易に講述せし者也



●正信偈講義

(四版) 前田慧雲師講述 定價十二錢 郵稅二錢

本講は眞宗願學前田師が眞宗安心を平易に領解せしめんため深切に釋さし者

●普勸坐禪儀講義

(四版) 山田孝道師講述 定價二十錢 郵稅四錢

坐禪の眞儀及び心得方を解説して漏さず僧俗共に修禪者の好伴侶なり

●菩提心論講義

合本 姫宮大圓師講述 定價十三錢 郵稅二錢

●大乘止觀頌講義

釋 清潭師講述

八宗の祖師と崇めらるゝ龍樹菩薩の菩提心論を平明に釋く者也大乘止觀頌は天台宗の觀心の要義を師が平易に講述せし者也

●因明學大意

村上專精師講述 定價三十錢

●因明三十三過本作法講義

池原雅壽師講述 (再版) 郵稅四錢

因明學は五明學の一で論理術を研究する學なり一讀千金  
○三十三過本作法論理的に吾意志を成立するに過三十三を素索する也

●證道歌講義

山田孝道師講述 (再版) 定價十六錢 郵稅四錢

本書は參禪に志す者の必讀すべき良伴也熟讀の價大悟の値あり

●信心銘講義

山田孝道師講述 (再版) 定價十錢 郵稅二錢

此書は參禪の要旨を韻文にて説顯して證道歌と伯仲の必讀書也

●天台西谷名目講義

前田慧雲師講述 (再版) 定價三十錢 郵稅四錢

本書は天台宗の術語を集めしもの該宗の學をなすに最用初學有益の者

●華嚴學栞

藤谷還山師講述 定價十八錢 郵稅二錢

華嚴經は八十卷あり釋尊成道後最初の説法なり本書は其要義を示せり

●八宗綱要講義

(再版) 織田得能師講述 定價七十錢 郵稅六錢

南都東大寺凝然大徳が述べられしものにて八宗の要義を簡易に網羅せり

●梵文阿彌陀經講義

南條文雄師講述 定價四十錢 郵稅四錢

南條師は梵學に明なる識見を以て淨土教の基礎たる梵文阿彌陀經を述ぶ

●佛教大意

(四版) 織田得能師講述 定價二十錢 郵稅四錢

本書は日本現在佛教の三大宗に於て教理行果は轉迷開悟の一味道を明せり

●寒山詩講義

(三版) 若生國榮師著 定價四十錢 郵稅六錢

若生師が輕快流暢の辯舌もて寒山詩の玄妙なる奥義を發揮せられたる者

●般若心經講義

(六版) 大内青嶺居士講述 定價十五錢 郵稅四錢

●佛說法滅盡經講義

般若經六百卷中の眞髓を簡明に講じたる心經。末代の佛法滅盡する慘狀を講述せし佛法滅盡經。大内居士が特得の能辯もて平易に解釋せしもの也

●學道用心集講義

山田孝道師著 定價三十錢 郵稅四錢

本書は承陽大師御遺文中隨中の眞髓なり、宗祖の眞意を何人にも解了し得る様平易懇切に説かれたるもの也

●改悔文講話

全一冊 伊藤哲英師講述 定價十五錢 郵稅二錢

本文は蓮如上人の御遺述で眞宗の安心法門は疑らず明瞭に講述す

●大乘起信論義記講義

再版 織田得能師講述 定價七十五錢 郵稅八錢

釋尊滅後大乘佛教一時廢退せしを馬鳴師興隆せられたる妙論の通俗講義書

●七十五法名目講義

織田得能師講述 定價四十五錢 郵稅四錢

素人が佛教の奥義を知るに必要なる書也織田師が平易に説明せられたる者

●金剛經講義

釋 宗演禪師著 (三版) 定價二十錢 郵稅四錢

本經は佛祖の心法人類の性源を説顯したるを師が引證説明す

●俱舍宗大意

合本 齋藤唯信師講述 定價四十五錢 郵稅四錢

●三十唯識論講義

俱舍論三十卷あり印度哲學の隨一で佛教に必要な書を簡明に釋く者なり  
三十唯識論方法唯心の礎は佛教大乘家の主張する所其要領を明説せり

●修證義說教大全

曹洞宗務局文書課編 定價五十五錢 郵稅六錢

洞宗の安心たる修證義を斬新なる方法により説教の模範を示したるもの

◎日佛家人名辭書

鷲尾順敬先生著 定價金九圓 第二卷出來

●父母恩重經講話

若生國榮師講述 定價十錢 郵稅二錢

佛説父母恩重經は人道忠孝の大本を示されたるものにして全文を和譯し之れを平易懇切に説かれし者

●禪門法語集

訂正三版内容は各高僧の法語三十種を收む參禪者必須の珍寶也  
山田孝道師校註 (四版) 定價一圓五十錢 郵稅十六錢

●續禪門法語集

森 大狂居士校註 (再版) 定價二圓 郵稅廿錢  
本集は高僧碩徳の法語三十六種を收め禪味津津悟道の案内者なり

●一休和尚 一休和尚全集 (四版) 森大狂居士參訂 定價四十錢 郵稅六錢

一休禪師の隨筆、小説物語、謠曲、佛經講義、偈頌、和歌、盡く網羅す

●勅諭正 宗國師 白隱和尚全集 (四版) 禪學編輯局參訂 定價四十錢 郵稅六錢

白隱禪師一生八十餘年間横説堅説見孫の爲に垂示せる者のかな文法語集なり

●佛敎のすゝめ (五版) 山田孝道師著 定價三十錢 郵稅六錢

山田師が懇に古今東西の敎理を引證して圓融快活悲哀種々の法語面白し

●淨土 三經之大綱 齋藤唯信師著 定價廿五錢 郵稅四錢

我國佛敎各宗多き中に最盛なる淨土敎の基礎たる三經の綱領を解く者

●眞七祖の大綱 齋藤唯信師著 定價四十五錢 郵稅六錢

本書は淨土敎々義の父たる七祖につき學佛修道の士の爲め簡明平易に講せられたるもの

●佛敎倫理の大觀 (新版) 齋藤唯信師著 定價十二錢 郵稅二錢

廣大なる佛敎倫理の一斑を容易に知らしむる爲めに言文一致にて懇切に説きしもの

●武士 道 (五版) 安部正人先生編 定價卅五錢 郵稅六錢

山岡鐵舟居士口述 勝海舟翁評論 日本武士道につき鐵舟居士の講話せられたのを海舟居士の評を註せられしもの

●國文學 佛語解釋 織田得能師著 定價一四五十錢 郵稅不用

本書は國文學十二種中の佛敎語を平易通俗に解釋せられたる者

●日本哲學要論 文學士有馬祐政君著 定價九十錢 郵稅十二錢

日本の哲學的系統即ち神儒佛の發端及び其調和發達を概論せし書なり

●禪林叢書第壹編 森 大狂居士參訂 定價三十五錢 郵稅六錢

此書は東坡禪喜集、澤庵和尚垂示、正眼國師眼目を収む珍書也

●禪林叢書第貳編 森 大狂居士參訂 定價三十五錢 郵稅六錢

此書は承陽大師(道元)法燈國師等の和歌法語居士分燈錄を収む

●和漢高僧傳 織田得能師編 定價六十錢 郵稅六錢

本傳は織田師が意を注て漢土日本各高僧の傳を網羅せられたる者也

●校訂 大乘起信論義記 (三版) 縮刷 定價廿五錢 郵稅六錢

本書は大乗佛敎の眞髓とも云つべき良書也學佛者は必讀すべきものなり

●教育と宗教との關係 (三版) 文學博士元良勇次郎君著 定價郵稅共十五錢

教育と宗教とは離るべからざるかの要點を論じたる者也

● 佛教大家論集

全十二冊 定價一圓卅錢 洋裝合本一圓五十錢 郵稅不課  
本集は全部十二輯にして近代屈指の佛教大家の論辯説話は網羅して燦爛たり

● 禪門 殺活自在

(再版) 山田孝道師著 定價二十五錢 郵稅四錢

此書は師が優麗の健筆を揮ひ禪學の奧義を尤も平易に記したるもの也

● 佛教金言集

(再版) 織田世能師著 定價廿五錢 郵稅四錢

佛書浩漭一々披見し難し本書の如きは金言を抜粹明解せし者以て坐右の銘とせよ

● 通俗 活禪談

(三版) 形山若生園茶師著 第一集 各定價廿五錢 郵稅四錢  
第二集 各定價廿五錢 郵稅四錢

本集を一讀すれば生死苦樂無礙自在神通妙用も奇特にあらず悟道の要路也

● 鐵舟隨筆

海舟居士評論、泥舟居士校閱、安部正人先生編 定價六十五錢 郵稅十錢

近世稀有の大英傑たる鐵舟先生の十五才より晩年に至る隨筆を輯めたるもの也

● 延命 十句觀音經靈驗記

白隱禪師著 定價四十錢 郵稅四錢

白隱禪師が寶曆の頃横説堅脱廣く細索を盡せられたる垂範なり

● 訂正 曹洞在家日課要集

(三版) 松崎覺本師編輯 定價八錢 郵稅二錢

此編は専ら在家の日用行持に備へたる者至極便益なる小冊子なり

● ち

こ

● 櫻

(再版) 山田夢白君著 定價八錢 郵稅二錢

坊ちやんち嬢ちやん方へ佛教主義の面白い再ましの御話や唱歌が澤山々々

● 寢惚の眼覺

白隱禪師著 定價六錢 郵稅二錢

勅諭正宗國師白隱和尚が江戸へ曳鋤の時衆生の迷夢を覺破せられたる者

● 森田悟由禪師法話集

若生園茶師 白鳥勵芳師 共編 定價十二錢 郵稅共

本書は禪師の垂示、講話、法語等を網羅したるもの也

● 訓譯 原人論

釋 雲照律師著 定價五錢 郵稅二錢

本書は原人論の原本を雲照律師が懇切丁寧に訓譯せられしものなり

● 追善の心得

高田道見師述 定價三錢 郵稅二錢

本書は追善をする施主の心得方より供物の撰擇壇上の莊嚴等に至る迄苦口丁寧に説かれたるもの

● 施餓鬼の由來

高田道見師述 定價三錢 郵稅二錢

施餓鬼の緣由、其功德等何人にも解し易く問答体に書述べられたるもの也

● 益の由來

高田道見師述 定價三錢 郵稅二錢

字勘益につき其緣起、其功德を極平易なる詞にて自問自答したるもの施本には極適せり

●在家安心臨濟宗要義 平田眞道師著 定價四錢五厘 郵稅三冊迄二錢

臨濟宗信徒のために安心立命の法を解説せし平易簡明なるもの也

●靜坐のすゝめ 釋宗演禪師著 定價二錢 郵稅四冊迄二錢

熱心なる布教家禪定家たる師が天下の學生に向て禪を勧めたる者也

●脩養禪話 後藤北沢師著 定價廿五錢 郵稅四錢

本書は古今大禪定家の參禪學道の要訣言行理話等を網羅す趣味津津々

●大乘佛說論批判 文學博士村上專精著 定價五十錢 郵稅八錢

佛敎界千古の未決の大問題たる大乘佛說非佛說につき明晰精駁に解決せらる

●單刀直入 (三版) 若生國榮師著 定價郵稅共二十五錢

參禪修養の法を單刀直入的に懇々と説きたる禪學書なり

●茶禪一味 (再版) 田中仙樵著 定價郵稅共二十五錢

茶道と禪道と拵まる所を師の健筆もて説き盡されたる書なり

●禪 合本 一卷、二卷 各六十五錢 郵稅各十六錢

禪は膽力を養成し品性を修養するの要道也速に讀めよ讀め



